サーヴァントは愉快人！？

華山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サーヴァントは愉快人！？

【Ｎコード】
Ｎ５２５２Ｔ

【作者名】
華山

【あらすじ】
特殊主人公で、特殊サーヴァント。
外道な彼です。
では、開催しよう。
聖杯戦争、本戦を！！。

0――始まりの自覚（前書き）

ではどさっと行きまーす。

0――　始まりの自覚

なぜか、自分は倒れていた。

なぜ、ここにいる?。
なぜ、体が痛いのか。
なぜ、苦しいのか。

死にたくない。

その感情だけがはじめの思いだったと思う。

声がした。

「奇異な魔術師には、異例の英霊が似合いだろう。
健闘を祈る。」

自分は痛む体を我慢して周りを見る。

周りにはモノクロの何かがいて、気持ち悪い。
光が中央にある。

姿が見えた。

「面白い事になっているね。こんな事ってありなんだ。」

青年・・・だろうか?。
彼は笑顔を自分に向ける。
眼が合った。

「これは、天文学的なことかも。」

ぼやく声は響く。
天文学的、一体何のことだろうか?。

「あんたの声に応じここに参上した。」

自分に歩み寄り、今でも張り付いている笑顔で見る。
差し出した手には

『手を出してくれない?。』

と言っているようにも思える。
その程度自分で立てる。

「ふーん、あんたが俺のマスターで合ってるよね。」

応じるしかない。
ここに生きているのは自分しか居ないのだから。

「は、い。」

呆然とした頭。
未だに痛む体。
今が解らない、今、何が起きているのかが解らない！！。

「俺を呼ぶなんて、変わってる〜〜！。」

ぎゃははっと笑う。
マスター、この言葉には何を意味しているのかが解らない。
ただ、こいつのマスターは自分と言うわけが事実、らしい。

「そう言う事で、力を貸してあげるよ。」

なに、この軽さ。
理解不明で、とんとん拍子に話が進む。
おかしいとしか言えないのが現状況下。

「君の答(願い)えの終わりまで一緒に居る事を誓うよ。」

手の甲が痛む。
見ると奇妙な模様があった。
刺青のようにも見える。
まるっきり、解らない。

怖い。

後ろを向くと人形が立っていた。

「じゃ、指示をお願い！！。」

彼が宙に手をかざす。
その動作には、無駄がない。
両手の片手に、剣を持っている。
右には折れた黒い剣、左には折れた剣を握っている。

「まずは、お互いに下調べって事で、満足はさせるさ。」

戦いに入る。
空気が変わる。
こんな自分が指示をしていく。
それは一方的な戦い。
こんな非常識な事が起きていいのかと思う。

いや、ありえないはずなんだ。
ありえない、ありえない。
何がだ。

いや、その前に自分は誰?。

自分の名は・・・何?。

どこにも居る・・・なんだ?。
思い出せない。
つい最近の事すら思い出せない!!。

「ギリ合格。」

声が現実に戻してくれた。
終わった、ようだ。
戦いが終わったみたいだ。

「今後よろしくね。」

軽い表情で何かを言う。
何だろう?。
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。
何かを思い出してはいけない。
なぜか、そう思える。

「手に刻まれたそれは令呪。
サーヴァントの主人になった証だ。」

声が響く。
空からだ。
空から声が響いている。

「使い方によってサーヴァントの力を強め、あるいは束縛する、三つの絶対命令権。
まぁ、使い捨ての強化装置とでも思えばいい。」

聞き取るだけでもつらい。
立つのがつらい。
ふいに横を見る。
・・・、支えてくれていた。
ウィンクしてくれる。
助かる。

「ただし、それは同時に聖杯戦争本戦の参加資格でもある。
令呪をすべて失えばマスターは死ぬ。注意することだ。」

「困惑していることだろう。しかしまずは・・・」

支えて貰っているのに、もう、精一杯になりつつある。
困惑。
勿論そうだ。
本戦という事は、予選もあったというわけだ。
どういうことだ?。

「おめでとう。傷つき辿り着いた者よ。
主の名のもとに休息を与えよう。
とりあえずはここがゴールという事になる。」

ゴール??。
何の意味だか解らない。
考えるよりも聞く事にしよう。

「随分と未熟な行軍だったが、だからこそ見応え溢れるものだった。
」

失礼な。
文句の一つも言えない。

「いや、私も長くこの任についているが
君ほど無防備なマスター候補は初めてだ。」

失礼そのものだ。
回りくどいが馬鹿としか言っていない。

「誇りたまえ。
君の機転は、臆病であったが蛮勇だった。」

どうでもいい。
こいつはむかつくやつだ。
主の名のもとに、神父かシスターの関連としか思えない。
こいつは、神父だ。
きっと、性格、根性が捩れ曲がった奴だ。

「おや、私の素性が気になるかね？。
光栄だが、そう大したものではない。
何しろただのシステムだ。」

はい？、疑問が顔に出ていたらしい。
ただのシステム。
そうだ、たしかにここは現実のように感じる。
なら、こいつは・・・どういう事だ。

「私は案内役にすぎない。
かつてはこの戦いに関与したある人物の人となりを
元にした定型文というヤツだ。」

ますます、理解に苦しむ。
ややこしい、回りくどい説明だ。

「私は言葉であり、君がいま越えた峰であり、
かつて在った記憶に過ぎない。」

なら、なぜ、自分の疑問に答えるか。
どういう事だ。

「一定の答えは言えないと、でも?。」

「そうだ。だが、これもまた?奇異?だな。
君に何者からか祝辞が届いている。
‘光あれ’と。」

電波か?。
誰だろうか?。
以外にこの人の元になった人からか?。

「では洗礼をはじめよう。
君には資格がある。」

なんの事だろうか?。
身に覚えがない。

「変わらずに繰り返し、飽くなく回り続ける日常。」

それは何だ。
自分が私が自覚する以前の出来事だろうか?。

「そこに背を向け踏み出した君の決断は、生き残るにたる資格を得た。」

何のことだ?。
生き残る、資格とは何のことだ?。
解らない、解らない。

「しかし、これはまだ一歩目にすぎない。
歓びたまえ若き兵よ。
君の聖杯戦争はここから始まるのだ。」

聖杯戦争。
一歩目?。

「何なのよ。」

解るのは自分は私は
とんでもない事に巻き込まれたということだ。

「然り。
かつて地上には全ての望みを叶える、
万能の願望機が存在していた。」

うん、解ったのは
責任者、出て来い！！と言うことだ。

「人々はその奇跡を“聖杯”と呼称し、
多くの欲望が無限に求め争い、
しかして、至るのは　たった一人のみ。」

一人、一人！！。
なんじゃそれ、鈍痛がしてきた。

「この戦いは、このシステムは、そのカタチを継承したもの。」

このノリは、このノリだとすると。

「聖杯を手にする唯一人になる為の、
魔術師たちの命を賭した戦争。
君は、その入り口に立ったのだ。」

ふざけるな。
気が付くと、
はい、参加しなさい、死になさい。
と言われて、はい！　と言えるかよ！！。

「聞け、数多の魔術師よ。
己が欲望で地上を照らさんと、
諸君らは救世主たる罪人となった。」

この説明に呆れた。
しかし、私の命のかかった戦い。
おいそれとは、無視もできない。

「これからの戦いを切り開く為に用意された英霊。
それが君の隣にいる者だよ。」

さっきから支えて貰っている彼を見る。
どこにでもいる、黒いコートの男。
どこにでもいそうだ。
実力は英霊の名に恥じないものだと思う。

彼が、私のサーヴァント。

「君の決断は既に見せてもらった。
もはや疑うまい。
その決意を代価とし、聖杯戦争への扉を開こう。」

痛い。
痛みが増してくる。
もう、もう、立てない。

「では、これより聖杯戦争を始めよう。
いかなる時代いかなる歳月が流れようと、
戦いをもって頂点を決するのが人の摂理。
月に招かれた電子の世界の魔術師たちよ。
汝、自らを以って、最強を証明せよ。」

0――始まりの自覚（後書き）

紙に写してじわじわ、頑張っています。

0_1　矛盾した名前（前書き）

次に、解説、キャラ説明。

0―1　矛盾した名前

彼は銃を持っている。
彼は心が泣いて、顔はいつも、仮面を被っている。

許さない。

それが、彼の心(叫び)。

許さない。

銃弾の音が響いて、
今、確実にどこかの誰かが死んだ。

許さない。

なぜ、泣いているのか。
私に教えてください。

まだ、終わらない。

こんな出来損ないの自分には理解は出来ません。
それでも、それでも、
何を私は考えているのですか?。

ここは、どこだ。
起き上がって周りを見る。
保健室だろうか？。
ならば、ここは学校だろうか？。

自分、いや、私はたしか、サーヴァントと言う従者が居て、
戦争、聖杯戦争に参加したはずなのだが、夢？。
ありえない。
ベットから足を出す。
座っている体制になる。

「ん、起きたか。マイペースだよな。」

うん、夢ではなかったらしい。
顔を上げる。
黒コートで身を包んだ、白髪の黄色、アジア系の青年が居た。

「体の調子はどう？。」

私の調子を気にかけているよう。
よく解らない。

「聖杯戦争の本戦が始まったから、

自己管理も大切な仕事のはずと思うのですが。」

心配をしてくれていたらしい。
我ながらそこまで頭が行かなかった。
この戦争の事しか頭になかった。

「で、聖杯戦争についての理解はしているのか?。」

「しているよ。」

知っている。
たしか、殺し合い。
解っている。

「じゃあ、サーヴァントは?。」

サーヴァント。
七つのクラスだったような気がする。

「大丈夫。」

言うと平坦な顔に戻る。

でも、笑顔がデフォルト、標準仕様なのですが。
にしても、逞しい体な事。
プチヒッキーな私にはない体と体力があると解る。
当然か。

「ふーん、あっ、俺のクラスはアーチャーね。
弓兵ね。」

アーチャー、なんと言うか軽い、ラフな感じだ。
サーヴァントの実力は大丈夫なのか、と思う私は悪くない。

アーチャー、アーチャー、こいつが?。
どちらかと言うと、暴れん坊。
アーチャーらしさがこう、感じない。
違和感が強い。

どこの英霊さんだ。

「俺の真名を知りたいの?。」

やや驚いた顔になる。
何にしろオーバーリアクションすぎる。
なんだろう。
すごく、親しみ易い。

「残念でした。
俺の知名度は底辺の底辺。
参考になるわけがないのだよ！！。」

ははは！！。
アホと言われているよな？。
訂正、こいつの性格は何処か捻じ曲がっている。

「俺の真名より、強さ、性能を解ってくれれば、
それでよし、なのですが、何？。」

にしても、子供がでかくなった構図のようだ。
明るいのがまだ幸いだろう。
皮肉を言われるより、マシ、かな？。

「なので、親しみを込め、アーチャーと呼んでくれ！！
この聖杯戦争は、真名はあんまり重要では無いみたいだし。」

「なら、教えろや。」

私は思う。
あんまり重要じゃないなら、教えても関係ないでしょうが。

「無理です。」

にゃは☆で消える。
これも、サーヴァントの基本技能、標準機能だろうか。
底辺の底辺なら姿を出してもいいと思う。
そう思うのは死に直結するのだというのは、理解をした。

「ごめん。」

俯いて呟くと、頭をなでられる。
顔を上げてもそこには何も無い。
笑顔を向けられているような気がする。

ドアの開く音がする。
音の主は紫色のロングヘアーの可愛い系の女の子だ。

「あ、黒井さん。
　眼が覚めたんですか?、よかったです。」

黒井・・・それが自分の名前?。
いや、私の名前は、西谷　ゆら。
なぜ間違えるのだろうか。

「体の方は異常ありませんから、
もうベットから出ても大丈夫ですよ。」

うん、もう出よう。
黒井、黒衣・・・・・、うん、不吉だ。

「セラフに入られた時に
預からせていただきました記憶は、返却させていただいのでご安心を。」

セラフ?。
返却?。
いやいや、どうなっている。
私の記憶は・・・、
モノクロの何か、人が倒れている所からだ。
いや、私が西谷ゆらだと言う、認知が間違っているのだろうか?

「以上が予選のルールでした。
貴方も名前と過去の記憶を取り戻しましたので
確認しておいてください。」

聞き逃した。
でも、解ったのは私の記憶は
あのモノクロの人が倒れているとこからだ。

過去が思い出せないし、
どれがこうだと言われても解らない。
名前が矛盾していて、過去も記憶も思い出せない。
むしろ、私がこの学校で生活していた事に驚く。
おいおい、何に驚いているの？。

「どうなって、いるの？。
私に、確かに記憶を返却したのよね？。」

何がどうで、この学校が何なのか。
変、あぁもう、意味が解んないよ！！。

「え？、記憶の返却に不備がある、ですか・・・？
それはわたしには何とも
私は運営用に作られたＡＩですので。」

どうなってんだ。
解る事はあの声の主と同じ、と言う事。
真面目にどうなってんだ。

「あ、それからこれを渡しますね。」

機械だ。
というより、私、西谷ゆらは機械に弱い。

これは、外国のどこかの国の受信用?。
どうして、雑学的な事を思い出すんだよ!?。

「本戦の参加者は表示されるメッセージに
注意するように、との事です。」

そうか。
まずは、自分について調査をしよう。
きっとは、クラスメイト・・・が
声をかけてくれる、と思いたいのですが。

保健室を出た。

扉の外は懐かしの廊下だ。
自分が懐かしいのか、私が懐かしいのかが解らないけど。
本当に学校が舞台なんだ。

階段を下りる事にした。

〔B1F〕

食堂?、のようだ。
美味しそうなパンが沢山ある。
食堂なら、うどんが食べたい、
チキンカレーがあればいいけど、やっぱりマイナーだ。

「何、これ。」

体操服が売られていた。
コスプレの売買もしているらしい。

「礼装の購入ですか？」

うわ、ファンタジー。
ちょい待て。
ファンタジー、うん、ファンタジー。
普通なんだよね。
この電子の世界では、普通なんだよね？。

カレーパン。
辛い、嫌だ、嫌い。
焼きそばパン。
ボロボロする、却下。

説明では、マスターの魔力を回復できるらしい。
・・・。
パンが？？？？？。
しかも、回復量が極小。
買わん方がいいと判断した。
エーテル粉末や欠片はサーヴァントの体力？？の回復。
なら、こっちを買う。
体力と言うか、

サーヴァントと言う粘土の傷に、粘土で埋める的な物か？。
次は、二階に行って見よう。

〔2F〕

「よ、黒井もマスターだったか！。」

軽いノリの男。
見渡せば同じ姿のような気がする。
茶色い髪の男がその辺にゴロゴロいる。
聖杯戦争に、殺し合いに、
参加していると言う自覚をしているのだろうか？。
どうでもいいと思っているのか？。
解りやしないが。

「今、教室に入れないんだよ。」

教室。
懐かしい言葉だ。
私は何歳だと突っ込む。
心の中では空しさ満載だ。
窓から見た外の風景は綺麗だった。
幻想的だ。

「屋上、に行こ。」

屋上なら綺麗な空を見れるだろう。
速まる足、気が付けば、階段を駆け上がっていた。

屋上は絶景だった。
そこに居るのは・・・、つい近づいてみる。

「一通り調べてみたけど、
おおまかな作りはどこも、
予選の学校とたいして変わらないのね。」

サーヴァントとおしゃべり中のようだ。
綺麗な女の人だ。
見惚れてしまう。
この女の人は、制服を着ていない。

にして、誰を見ても、記憶が戻らないみたいだ。

0_1　矛盾した名前（後書き）

矛盾している名前。
特殊につき、次回は解説。

作品の解説。

はーい、特殊尽くしのこの作品の軽い設定を
言います、書きます！！。

黒井理緒　女

この学校の生徒？？。
実は、聖杯戦争の参加者で魔術師、らしい。
しかしながら、
自身の自覚している名は西谷ゆら。
登録では黒井の名で登録されているようだ。

アーチャー　男

黒井理緒（西谷ゆら）のサーヴァント。
白髪のアジア系の男。
なにやらとはっちゃけている。
ゆら的には、
性格が捻じ曲がっていると言う認知。（０＋の一、二話では）
真名は、作者の書いた作品の外道様。
２０は越えている。

クラス適正　？？？　アーチャー　？？？　？？？

適正は左ほど高い。

西谷ゆら、自覚している名前の人が主軸なお話です。
なお、自分一人称と、私一人称があるのが設定にあります。
よろしくです。

0_2　出会いは爆弾（前書き）

衝撃の出会いだね。
うん。

0―2　出会いは爆弾

くるりと回って私を見る。

「あら、あなた。」

っう！？。
あ、あ、どうしよ、どうしよ！！。
眼が合った。声をかけられた。
どうしよう～～～。

「そう、あなたよ。」

そんな脳内を知らずに近づいてくる。
笑顔はとんでもなく綺麗だけどさ！！！。
体よ、動け！。

「そういえば、キャラの方は、
まだチェックしてなかったわよね。」

？？？？？？。
どういう意味ですか。
うわーーーー。

「うん、ちょうどいいわ。
ちょっとそこ動かないでね。」

つ・・・。
べたべたべた。
頬を撫でられる。
私は女に興味ない、私は女に興味なんか無い。
GLとか、そんなのには無縁だからね!!。

「へぇ、温かいんだ。生意気にも」

う、うん。
いい匂いがする。
思い出せ、現状況でも色々思い出せるかもしれないんだぞ。
うん、私はノーマルと言うのが判明した!!。
だと、いいな。

「あれ?、おかしいわね、
顔が赤くなってような気がするけど・・・。」

顔がもっと、近くに来る。
やだ、私はそんな気なんてない。

私に無くても、貴方にあるのね、そうね！。
いやーーーー！！。
なによ。
この状況は悪すぎるわ、悪すぎるのよ！！。

「なるほどね。
思ってより作りがいいんだ。」

あれ？。
この人、私の事を仮想・・・ＮＰＣと思ってる？。
うん、そう思うとしっくり来る。
ＮＰＣやＰＣ、
外来の人とは中身や仕組み的なとこに違いがあるのか？。

「見かけだけじゃなく感触もリアルなんて。
人間以上にほめるべきなのかしら。」

もう、駄目です。
私のＨＰは０です。
ヘルプ、ミー。

「ちょっと、何笑ってんのよ。
ＮＰＣだってデータを調べておいた方が
今後の役に・・・・。」

私には笑う余裕も無い。
余裕があれば注意をしているはずだ。
この人のサーヴァントが笑っているのか?。

「え?
彼女もマスター?」

やっと、気付いたか!!。
心の叫びが出た。

「ウソ・・・だ、だって　マスターならもっと」

「バカー、この子が俺のマスターでーす。」

こいつ、もっと早くに助けないのか。
相手は飛び跳ねるように叫んだ。
お前が悪い。

「いんやー傑作、傑作。
オジさん、いいもんを見れたよー。」

アーチャーは楽しそうに笑う。
楽しいほうがいいのか？。
思い出すと、素晴らしいと言うぐらいに真っ赤になる。
私も、だけど。

「くっ、なんて恥ずかしい。」

私も恥ずかしいです。
そんな私たちを見て笑っている。
もう、ニヤニヤの域を越してニタニタだ。
変質者、アーチャー。

「うるさい、わたしだって失敗ぐらいするってーの！。
痴女とか言うな。」

さすがに相手は出て来ない。
やはり、アーチャーは特殊なのかと解った。
見えないサーヴァント、
もっと言え、言っちゃえーーー！！。

「職業病みたいなのよ。
これだけキャラのモデルが
精密な仮想世界も無いんだから
調べなくてなにがハッカーだっての。」

ハッカー。
たしか、ここは電子の世界。
調べる人？なんだ。

「大体、そっちも紛らわしいんじゃない？
マスターのくせにそこいらのモブキャラと
同程度の薄さってどうなのよ。」

うわ、言い訳のようにしか聞こえない。
事実だけど、うん。
言い返す余地も無い。
記憶は戻ってないし、
どちらかと言うと予選すら忘れた逝かれた頭だ。
名前も矛盾している。

「今だってぼんやりした顔して、
まさかまだ予選の学生気分で
記憶がちゃんと戻ってないんじゃないでしょうね？。」

どーしましょう。
まさか、予選の事すら忘れて更に現実の記憶に無いと
思ってもないでしょう。
うーん、まだまだ私もよく解らないのです。

「そうとしか、言いようがないかなぁ。」

嘘は言ってない。
嘘はついてない。
本当の事だ。

「え・・・ウソ。
本当に戻ってないの？
それって・・・かなりまずいわよ。」

やっぱり。
かなりのやばさって事か。
冷静に捉える私が居た。
動揺した自分が居た。

「聖杯戦争のシステム上、
ここから出られるのは、
最後まで勝ち残ったマスターだけ。」

「途中退出は許されないわ。」

当たり前だろう。

残酷極まりない事実。
あっさりしている私。
どうして、そういう風に私は捉えれるのか。

「記憶に不備があっても、
今までのバトルログがなくても、
ホームに戻るコトはできないのよ?。」

あーうん。
むしろ、今の専門用語を解説してください。

「・・・あ。」

何かに気付いたらしい。
アーチャーと私はお互いに眼を見る。
何?。
解んない!。
簡単なレクチャー。
たやすく伝わった気がした。

「でも、別に関係ないわね。
聖杯戦争の勝者は一人きり。
あなたは結局、どこかで脱落するんだから。」

「ありえないね。」

否定の声。
それは、自分のサーヴァントからだ。
私と彼女はアーチャーを見る。
顔には別の笑顔が張り付いていた。

「俺を引いたこの子が弱いわけがない。
それに、なによりも俺という存在と同じ確立だろう。」

何を、どういう事を言っているのかが解らない。
確立。
あの時の天文学的確立というのと同じだろうか。
私がその確立??。

「まったく、一つは言い返しなよ。」

意味解らん助け舟を出したつもりらしい。
こいつは混沌目的だろうね。
マスターと言ってないのが気になる。
なぜに、あえてこの子といったのか。
じゃあね〜〜。
という感じに手を振って消えた。
コホンという、咳き込みが聞こえた。

「今回のオペは、
破壊専門のクラッキングじゃなく、
侵入、共有のためのハッキングだったし。」

今さっきの調べていた奴?。
このあたりの知識がない。
ちょっとした装飾の
破壊専門や侵入、共有という言葉がないと解らなかった。
だめじゃんか。

「一時的にセラフが防壁をおとしたといっても、
あっちの事情はわたしたちに知れないしね。」

確かに。
いや、そもそも、
防壁って・・・ファイアーウォールの事ですか。
どうしようもない自身の知識に呆れが出てきた。

「あなた、本戦に来る前に、
魂のはしっこでもぶつけたんじゃない?。」

・・・・・。
心当たりはある。
あれの事だろう。

「ロストしたのか、
リード不能になっているだけか
あとで調べてみたら？。」

その言葉の意味も解らんわ。
どうなっているのよ。
どうしようもないじゃない。

「ま、どっちにしても、
あなたは戦う姿勢がとれてもないようだけど。」

それ以前の問題です。
予選の意味は学生になる事ですね程度しかわからんよ。

「覇気と言うか緊張感と言うか・・・。
全体的に現実感がないのよ。
記憶あるなし、関係なくね。」

その通りです。
解っていますとも。

「まだ夢でも見ている気分なら改めなさい。
そんな足腰定まらない状態で勝てるほど

甘い戦いじゃないわよ。」

やさしい。
本当にやさしい。
記憶喪失、確かにそんな感じだ。
なぜ、こんな危険なことに参加しているのか？。
解るのは、
私がサーヴァントを従えたマスター（参加者）だという事だけだ。

0＿2　出会いは爆弾（後書き）

もっと言えよ。
名前不明な扱いなんですよ?。
遠坂さんの扱いが！！。

0_3　困惑する事態（前書き）

二重三重にあれ、あれ？。
な感じです。

0_3　困惑する事態

教室が賑わっていた。
なんというか、場違いな騒ぎだ。
殺し合いと、説明を受けている身のはずだ。

パン、購買でも見に行こう。
クリームパン、チョコパン、小豆パン。
美味しそうだね。

降りていくと、これたま場違いな男がいた。

「本戦出場おめでとう。
これより君は、
正式な聖杯戦争参加者にとなる。」

何処かで聞き覚えがある声だ。
何処だっけ?。

「私は言峰。
この聖杯戦争の監督役として機能している
ＮＰＣだ。」

次から次へと、これが私の流れか。
自分にも納得がいかないのですが。

「今日この日より
君たち魔術師はこの先にあるアリーナという
戦場で戦う事を義務付けられた。」

義務ですか。
いい加減にしやがれ。
あぁ、また、頭とかが痛くなってきた。

「この戦いはトーナメント形式で行われる。
一回戦から七回戦まで勝ち進み、
最終的に残った一人に聖杯を与えられる。」

トーナメント。
解りやすい。
一対一というわけか。
いや、正式には二対二か？。

「つまり、１２８人のマスターたちが毎週殺し合いを続け、
最後に残ったたった一人だけが聖杯に辿り着く。」

うわー、解りやすい。
解りやすくて、いいです。

「非常に解り易いだろう?。
どんな愚鈍な頭でも理解可能な
実にシンプルなシステムだ。」

余計な事を言うな。
このまま突っ立って居たい。
いや、説明してくれているんだ。
無視だけは駄目だ。
それでは死ぬだけだ。

「戦いは一回戦毎に、7日間で行われる。
各マスター達には1日目から6日目までに、
相手と戦う猶予期間がある。」

・・・・。

「君はこれから6日間の猶予期間で、
相手を殺す算段を整えればいい。」

いよいよ、私にとっても本番の本番は来るわけか。
あの人形戦で指示をしただけで不安だったが、
大丈夫だろうか。
いや、絶対大丈夫にしないといけない。

「最終日の7日目に相手のマスターとの
最終決戦が行われ、勝者が生き残り
敗者にはご退場いただく、という具合だ。」

ご退場ねぇ?。
はっきりと言えば良いのに。
性格の悪さが滲み出ている。

「何か聞きたい事があれば、伝えよう。
最低限のルールを聞く権利は、
等しく与えられるものだからな。」

さっさと生き残る事に集中したい。
私は生き残りたいから。

「そうか。
では、君が無事に
決戦に辿り着ける事を祈ろう。」

ほぉ、私が死ぬと?。

ありえない。

「ちょっと待って。」

そうだ聞かないといけない。

「どうしたのかね。」

「私の対戦者は誰。」

今日のあの騒ぎは
きっと対戦のことだ。
この事を指すと思う。

「何?。
一回戦の対戦者が
まだ、決まってないだと?。」

まさか、私だけと・・・じゃないでしょうね。
勘弁しろ。

「そうよ。」

不満が爆発しそうだ。
どうなっとる。

「ふむ・・・少々待ちたまえ・・・・。」

おいおいおいおい。
まじですか。
まさかのまさかですか。

「妙な話だが、
システムにエラーがあったようだ。
君の対戦者の組み合わせは明日までに手配しよう。」

落胆と溜息が出てくる。
やっぱりと自分は思った。

「それから最後にもう一つ。
本戦に勝ち進んだマスターには
個室が与えられる。」

小さな端末が渡された。
カードのようだ。
個室か。
良い響きだね。

「君が予選を過ごしたクラスの隣
２－Ｂが入り口となっているので、
その認証コードを端末に入力すれば良い。」

そうか。
では、早速アーチャーに聞く事がある。
あとで問い詰めよう。

「さて、これ以上　話をしても仕方があるまい。
アリーナの扉を開いておいた。」

まずはと言う事のようだ。
お詫び？のようなものだと解釈しよう。
うんそうしよう。

「今日のところはまず、
アリーナの空気に慣れておきたまえ。」

え、どこ。

「アリーナの入り口は
予選の際、君も通ったあの扉だ。

では、健闘を祈る。」

うん、まずはアーチャーから聞き出そうか。
其処からだ。
その前に、購買に行って美味しいパンを買おう。
話のおつまみにはなるだろう。

買った買った。
では、２階へ行きますか。
２ーＢを目指した。

〔Ｆ２〕

２ーＢが紫色の・・・扉になっていた。
入ろう。
端末をかざした。

「うん、教室だ。」

「だね。」

もっと、もっと、小部屋みたいだと思っていたけど。
ベットとか、あるという想像が崩れた。

「話し合うのにはちょうどいいね。

てか、それしか、無いよ。」

見事に私の残念顔にもう一撃。
そうですね。
内心では疲れが出てきた。
他のマスターに盗み聞きはないと思う。
さて、聞きますか。

「なんで、私のことをあの子って言ったの。
マスターの統一でいいじゃない。」

ハトに豆鉄砲。
以外に間抜け顔だった。

「今日・・・間桐桜に名前で呼ばれたよね。」

・・・・・。
確かに、端末には黒井理緒。
でも、私の名前は・・・・。

「うん。」

違う、違うの。
私は、私は『西谷ゆら』なの。

「あの顔は驚きを通り越した顔だったぜ。」

どうしたの～という感じで聞いてくる。
お兄ちゃんって居ればこんなもんなのかな？。
アーチャーの顔が真剣みが出てくる。

「だから、理由を聞きたい。」

言うのが簡単だった。
簡単に私の口が開く。
簡単に声を出した。

「私の名前は、西谷ゆら。」

そうだ、私が私と自覚している名前が
西谷ゆらだ。
決して、黒井理緒ではない。

「私の名前は西谷ゆらなの。」

ボロボロと何だが出てくる。
西谷ゆら、これが私の名前なんだと、
思う。

アーチャーが近くまで来て、頭を撫でてきた。

「大丈夫。
ここには俺が居るでしょう。」

もっと、泣いていいよ。
と聞こえる。
私は声をあげれずに泣いた。
今は、今だけは、泣いてもいいよね？。

やっと、涙が止まった。

「よし。
では、マスター改めゆらと呼ぼう！！。」

はい？。
頭を鈍器で殴られたような衝撃。
何といいました。

「誰かが呼ばないと
名前なんてあっと言う間に忘れるぜ！。」

○＞☆（横ピース）　キラリン☆と言う感じだ。
え、えっと・・・。
この人のペースと思考回路はどう言う事。

「だからさ、俺が呼んであげる。」

拒否権って無いような気がする。
にこにこにこにこにこ。
毒気が抜ける。
こいつは一体、何者です？。

「お願いします。」

「おうともさ。」

言うと、笑ってくれた。
馬鹿に明るいサーヴァントな事で。

0_3　困惑する事態（後書き）

うん、こんな感じです。

0_4　迷走する主従（前書き）

６文字で表現するタイトル。
まんまですけど。

0―4　迷走する主従

神父に場所を聞くと、この先らしい。
まさか、まさか、だけど、私のことに感づいているとか?。
無いよね。

「ゆーらーさん。
アリーナから出ると明日になるぜ。
やり残した事があるなら、アリーナに入る前にすましてねぇ。」

イラつく。
どこまでも明るい彼だ。
重苦しいのとかも忘れる勢い。
なんだか、きゃぴきゃぴしている感がある。

「解ったわ。」

言うと消える。
最低限の警戒はしているよね。
大丈夫かな。
不安が大量に押し寄せてくる。
それでも、頑張んないと。
非常出入り口を入っていった。

初めてのアリーナは
綺麗な線のダンジョンのよう。
そして、怒りのような激情が感じる。

「はいはい、注目！！。」

パンパンと銃音が響く。
肘で適当に突く。

「ぐっ、いい一撃だ。」

身長差でなんか、良いとこに入ったらしい。
やりました。
アーチャーが悪い。
今のは、アーチャーが悪い。

「このアリーナでのみ戦闘が許可されてるの。
まぁ、アリーナと決戦限定なんだよね。」

ふぅん。
まぁ、こういうルールは

サーヴァントに組み込んでいるのか。
こいつは、良い人なのに性格で損している気がする。

「エネミー、敵性プログラムがどんどん襲ってくるからな。
俺が負けないように気をつけろよ。」

それを笑顔で言うか。
すっごく迷惑。

「さてさて、ドーーーンと突き進もう。
危なくなったらアイテムか礼装でヨ・ロ・シ・ク。」

そんな感じで進む。
敵が居る。
フヨフヨ浮かぶ箱、アレがエネミーか。

「あと、指示しだいでは、
雑魚でも負けしれないからな、です。」

気をつけろ、と言っているのか。
余計にプッシャーだわ!!。
そんな私を見て、ププと笑っている。
色々、ふざけんな!!。

打ち合い。
弾いて、斬って、
でも、アーチャーだろ！！。

黒い剣と折れた剣って。
まぁ、戦闘は見ているんだけどさ。
あの人形との勝負で、だけど。
黒い剣は禍々しさが感じる。
唯黒いだけなのに、嫌な感じがする。
折れた剣には、強い何かが感じる。

「切れ味までは、衰えなし。」

どう言う事です？。
サーヴァントは凄い。
ブレイクでのあのサブマシンガンは・・・何！！。
左で撃つなんて凄いと思うけど、折れた剣は何処ですか！！。

「さーて、つぎつぎー。」

アーチャーの謎が深まるばかりだ。
黒いコートには、秘密が詰まっているのか！？。
そして、礼装が大量にあったのに驚いた。
え、どうしよ。

「おっ！、このマフラー、
今の状態の俺にはちょうどいいよ。
小回復だってさ。」

そういうもん、なのね。
なんで、私がこんなもんを持ってるの。
よく解らない、浮かぶ箱を触ると、
アイテムゲット的な事になった。

「ふー、こんなもん？。」

まぁ、なんとか、蜂もどきのエネミーを撃破も出来た。
危険だよーって言われたけど、軽く強行。
アッタクとブレイクだけというエネミーというのもつらい。
厄介だし、戦う事に慣れないと。
後は、場数というものか。

「ふーん、帰るんだ。
じゃ、早く行こうかね。」

へとへとだ。
初日はこれ位がいいと思う。

アリーナから帰ると、個室に直行した。

「問題があったよ。」

・・・？。

問題、ですか。

アーチャーの顔もどこか、変。

あの明るさが無い。

「今さっきの戦いでよーーく理解したよ。

俺は本来の力も出せてない。

この様子だと、マスターであるゆらに合わせているな。」

敬語！！。

何気に深刻げだな、ソレ！！。

「ははは、うん。」

絶望したってやつか。

口にするなや、アホが。

「まぁね、最弱が天才に勝つ事は
大量にあるぜ。
それなりに、死に掛けるけどさ、うん。」

それもそれで悲惨だよ。
こいつは、何回、死にかけてんだ。
考えるぐらいより、上なんだろうね。

「あれね、
死ぬ気でやれば、どうにでもなる。
ってやつなのね。」

あはははははは。
なんという、才能の無さだ。
あはははははははははははは。
泣きたいよ。
死なないためにも特訓だぁ。
あは、あはははは。

うわん。

0_4　迷走する主従（後書き）

うん、頑張っています。

1―1　敵は粘着陰湿（前書き）

はい、ワカメ君。

1―1　敵は粘着陰湿

電子音が響いた。
携帯端末からのよう。
見ると、文字がそこにあった。

：：２階掲示板にて、
　次の対戦者を発表する。

ついにの発表。
殺し合い、決戦の相手。
嫌でも、時間が進む。
時間はみんながみんな平等に流れる。

では、行こう。

掲示板に紙が張られていた。

自分の名と、殺す相手の名前がある。

マスター：間桐　慎二

決戦場：一の月想海

うん、誰。

「へぇ。
まさか、君が一回戦の相手とはね。」

振り返ると、ありえない青い髪が見えた。
誰だ、こいつは。
考えても、答えなんかでない。

「この本戦にいるだけでも驚きだったけどねぇ。」

嫌味、歪んだ笑い顔。
見るからに陰湿さが滲み出ている。

これが対戦相手。

相手は自分の事を知っているようだ。

「けど考えてみれば　それもアリかな。
僕の友人に振り当てられた以上、
君も世界有数の魔術師（ウィザード）って事だもな。」

どうやら、自分はこいつの友人役をしていたらしい。
はは、まだまだ、どうなっているの、理解が出来ない。
大丈夫か私よ。
いや、大丈夫じゃないな。

「格の違いは歴然だけど
楽しく友人やってたワケだし、
一応、おめでとうと言っておくよ。」

うん、もちろんですとも。
そうですとも。
当然、実力の差が歴然ですよ。
軽く見られたくないから、うなずきもしない。
にしても、おめでとうは余計だと思う。

「そういえば、君、予選をギリギリで通過したんだって?。
どうせ、お情けで通してもらってんだろう?。」

人を決め付けた言い方はやめなさい。
こういう言いがかりは大嫌いです。
なぜだろう。
何でここまでに、心が白けるんだ。

「いいよねぇ凡俗は、
いろいろハンデを付けて貰ってさ。」

こいつは自分が天才の中の天才と思っているのか?。
訂正、こいつは自分酔いのナルシストだ。
こいつは、戦争と言う意味をしっているのか。
どちらかが確実に死ぬんだ。
確実に絶対に。

「でも、本戦からは実力勝負だから、
勘違いしたままはよくないぜ?。」

勘違いなんて、しない。
あの時ほど、死を理解しているのだから。
あれが、敗者の死。

私は自分は、少しは覚悟をしている。

「けど、ここの主催者も
なかなか見所があるじゃないか。
ほんと、一回戦から盛り上げてくれてるよ。」

見所、悪趣味そのものだ。

慣れないことは無いほうがいいのに。

「そうだろ?。
嗚呼！　いかに仮初の友情だったとはいえ、
勝利のために友をも手にかけねばならないとは！。」

理解した。
こいつは何一つも覚悟をしていない。
命をかける意味も、ここ(本戦)に辿り着く前に
息絶えた人のカタチもこいつは知らない。

「悲しいな、なんという過酷な運命なんだろうか。
主人公の定番とはいえ、こればかりは僕も心苦しいよ。」

殴りたい、嫌いだ。
命をなんだと思っている?。
死を理解しているのか。
私の肩を叩く。
払いたい、今すぐに居なくなれ。

「ま、正々堂々と戦おうじゃないか。
大丈夫、結構いい戦いになると思うぜ?。
君だって選ばれたマスターなんだから。」

視界から、消えてくれ。
早く、速く、殴るその前に、居なくなれ。

「それじゃあ、次会う時は敵同士だ。
僕らの友情に恥じないよう、
いい戦いにしような。」

「アーチャー。
あいつを決戦で殺すよ。」

いいでしょう。
自分も死にたくない。
それに、決戦で真名がばれる事は無いはずだ。
彼だって、底辺の底辺と言ったのだから。
言葉を信じるなら、だけど。

夕方だ。
それでも、空は青い。
端末が鳴る。

‥‥第一暗証鍵(トリガー)を生成、
第一層にて収得されたし

第一暗証鍵?。
通達があるから、重要という事か。
取りに行こう。

〔1F〕

下に降りると居た。
敵が居た。

「お、黒井。
お前も暗証鍵(トリガー)を取りに行くのかい?。
悪いけど、僕もこれから行くところさ。」

急に高笑いをしだす。
付き合ってられない。

「お前みたいなノロマには
取れないかもしれないけどさ、
せいぜい頑張りなよ、あはは!。」

そう言うと、すぐに入っていった。
隣には、私のサーヴァント。
なぜに出てきた。

「へぇ、陰湿な奴なのかな。
ちゃちゃっと、躾に行こう。」

躾！？。
おいおい、それは、私でも聞き捨てられないぞ。

「B派なの！？。キモ！。」

「ちょい、やめぃ！。
そう言うのは二次とかの現実的だよ！！。」

そうか、二次とか、か。
まぁ、流石に否定の欠片はしているらしい。
こいつの性格は一体、どうなっているのですか。
アリーナに入ろう。
うん、そうしよう。

昨日、相手したエネミーをアーチャーが払う。
油断をすれば、こちらが負ける。
でも、箱のエネミーは油断してもいいかも、しれない。
先に進むと、・・・居た。
赤い女性がサーヴァントなんだろう。

「ゆら、覚えてね。
アリーナでは、今日のように対戦者と遭遇する事がある。」

だとしたら、
攻撃のランクがSだったら、危険じゃないの？。
って、思うのですが。

「好機、ピンチは状況によるよ。
今は情報を得るいいチャンスと思いましょうか！！。」

・・・。
ふざけているのか、真面目なのかが解らない。
でも、信頼はできる。
私を理解してくれたのだから。

そうだといいな。

「遅かったじゃないか、黒井。
お前があまりにモタモタしているから
僕はもう暗証鍵（トリガー）をゲットしちゃったよ！。」

ようは、足が速いのね。
おめでとうございます。
正直、アーチャーよりかあなたがウザイです。
その高笑いもウザイです。

「あはは、そんな顔するなよ?。
才能の差ってやつだからね。
うん、気にしなくていいよ!。」

あー、そこは理解してる、解ってるから。
大差もあるから、気にはしないよ。
つか、もう、私はあんたに興味ない。

「ついでだ、どうせ勝てないだろうから、
僕のサーヴァントを見せてあげるよ。」

隣にいるのがあんたのサーヴァントだろ。
人を馬鹿にするのも、いい加減にしろ。

「暗証鍵(トリガー)を手に入れないなら、
ここでゲームオーバーになるのも同じ事だろ?。」

なんだろう。
心が冷めていく。

「蜂の巣にしちゃってよ、遠慮なくさ!。」

ふぅん、それだけか。

「うん、お喋りはおしまいかい？。
勿体無いねぇ。
中々聞き応えがあったのに。」

「無いよ、そんな物。」

あぁ、なんだろう。
イライラする。
なぜ、自分は、こんな風に感じ、思うのだろうか。

「何を言ってるさ。
まったく、聞こえないぜ。」

なんで、そんな事を言えるのか。
なぜ、そのまでに軽々しく死を語れるのか。
なぜ、祭り事のように殺し合いに参加しているのか。
なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。

「お前は、ウザイ。
お前は、五月蝿い。

私は、私は・・・・・・・」

声がこれ以上、紡げない。
何を言おうとしているのかが解らない。

何かが、何かが響いて、何、何、解らない。

「私は、お前の事、嫌いだ。」

「黒井のくせに生意気だよな。
おい、痛みつけろ。」

頭の中が冷たい。
心が苦しい。
勝手に私の何かを踏み荒らす。
気持ち悪い。
気持ち悪い。
そんな事はどうでもいい。

剣と銃がぶつかり合う。

斬り合う、撃ち合う。

魅入られるな、殺す算段をつけろ。

今、殺さなくてもいいんだ。
今は、生き残るための少しでも、情報を得ればいい。

「少ししか、攻撃が入らない。」

マスターの差が歴然としている。
サーヴァントに差なんてあるのだろうか。
どうでもいい。
解ったのは、相手にも火力、攻撃のランクが低いと言う事だ。
これは、私には幸運だ。
粘れば、勝てるはず。

「回復、させるよ。」

なにがなんでも、負けれない。
どういう理由であろうとも、負けてんか、いられない。
それが、今、私を動かす原動力(理由)。

「チッ・・・・
セラフに感知されたか。
まぁいい、止めを刺すまでもないからね。」

どうでもいい。
本当にどうでもいい。

「勝手に言えば?。」

あぁ、こいつには何も無い。
何も無いのにむかつく。

「なんだよ、その眼は。
チッ、お前なんて、ゴミのように、
這いつくばっていればいいのさ!。」

「まぁ、このゲームの賞金も少しは恵んでやるよ。」

去った。
差は歴然としている。
なのに負ける気なんて無い。

「ふぅ、どうにかなったね。」

確かにと、思い頷く。
次に見たのは、軽く眉間に皺が寄っていた。

「でも、今さっきの挑発行為はよろしくないぜ。
うん・・・・」

「反論、自分をしっかりと持っていれば
どうにでもなるよ。
俺ね、心配したんだよ。

顔がまったく感情がでないからさ。」

まったく、解らなかった。
私は、そこまでに感情が出てこないか。

「今日の収穫は、あのサーヴァントの武器が
銃だという事だね。」

たしかに、あの、年代ある銃は昔のだと思う。
アーチャーの銃は、最近のだと思うぞ。
木製と鉄製。

「という事から、あの女のクラスは
俺と同じ、かもね？。」

仮だけどね。
でも、アーチャーと違って、なにかパッとしない。

なぜに、そう思えるのか。
端末に情報が浮かぶ。
書き込み機能があるらしい。

「アリーナ(ここ)では探索をすれば、
敵の情報を掴めたり、
俺たちに有利な状況を作れたりもするんだぜ。」

覚えろよ、と暗に言っている。
おまえはそう言うサーヴァントか。
意外なマメさに驚く。

「その日限定もあるかもだし、
アリーナ探索も納得するまで、だぜ。
ねー、ゆら。」

私に同意を求められても、困る。
重ね重ねに

「ありがとう。」

ぽんと、頭をたたかれる。
頭に手を置く、と言うやつか。

「そういうのは、全てが終わってから！。」

メッ。
としている、アーチャーに違和感を感じる。
いや、うん？、無いかもしれない。
ハハハ、そんな笑いがアリーナに響く。

トリガーを無事に回収した事と、
アーチャーが竹刀に興奮していた事をここに記しておく。
あのテンションには、ついていけません。
アーチャーの評価はちょっとはマシになったのは
勿論な事です。

1―1　敵は粘着陰湿（後書き）

あは、３８００文字はある。

2―1　打ち切れる女（前書き）

表示では
現在の経過した日にち（数字）、その一日の振り分け番号（数字）
という、やつです。
―の読みは、読者様の好きなようにお読みください。

2―1　打ち切れる女

私たちの控え室となった、元１－Ａ　教室。
私のほかにもマスターが居る。

「ゆーらーさん。
　前にも言ったと思うけど、
　敵の情報を得るのは大切だよ。」

なんというか、
私はマスターの威厳??が無いように思う。
だらけきった顔には明確な敵意はなく
言葉には確かな殺意を感じる。

敵。
アーチャー（性格悪い弓兵）に敵扱いされるなんて、お気の毒。

「学園調査もそれなりにしなよ。
　アリーナに入ったら
　その日の学園内の調査は出来ないし。」

まめだな、恐ろしく、まめだ。
とても助かる。
アーチャーは不真面目だけど

私の思いに、応じてくれていると、願いたい。

「電子世界とは言っても居るのは、本物の人間なわけだ。
その日、その日に起きている出来事が
翌日もまた、起きるわけがない。」

確かに、そうだけど・・・。
なんと、まぁ、言葉には所々ツン、
棘のような物が感じる。
悪意は無く、殺意のみ、と言う感じかな。
私と敵対するマスターにだから
当たり前だと、思うけど何か違和感が感じる。

「アリーナに入る前には
調べ物、聞き取り調査はしときなよ。」

うん。
了解です。
うなずくとにんまりと、満足げに笑った。
それも、すぐになくなる。

「さて、今日一日を、頑張りますか。」

その勢いで教室を出る。
ん、騒ぎ事かな。

「あーあ、
早速、アレが揉め事を起こしているよ。」

アレ、アレか。
しっくりして、仕方が無い。

「じゃ、盗聴と洒落込みます？。
ゆら行こうぜ。」

マスターではなく私(ゆら)の名前。
不意に安心してしまう。
では、早速近くに行って見よう。
にして、アーチャーが消えるのは早いね。

アレが誰かと居た。

「君はもう、
アリーナには入ったのかい？。」

相手にそんな感想を聞きまわってるんだ。
・・・。
馬鹿正直というとこだ。
話し相手は、痴女だ。
ベタベタ触りまくったあの人。

あの人曰くだと、
ムーンセルの電子世界は珍しいらしいけど。

「なかなか面白いとこだったよ?。
ファンタジックなものかと思ってたけど、
わりとプリミティブなアプローチだったね。」

うん、日本語崩壊。
そういえば、ムーンセルの反訳は
どうなっているんだろう。
当然のようにそんな所にも力を注いでいるに
間違いない。
それじゃあ、情報を集めれないし。

「神話再現的な静かな海ってところかな、
さっき、アームストロングをサーヴァントに
しているマスターも見かけたしねぇ。」

さっき、この人が?。
というか、サーヴァントを乱雑に扱っていいのか?。

「いや、シャレてるよ。
海ってのは、ホントいいテーマだ。
このゲーム、結構良く出来ているじゃないか。」

ゲーム。
なんだろう。
でも、こいつの認知が甘い。
アレ扱いと言うのはよく解る。

「あら。その分じゃ、
いいサーヴァントを引いたみたいね。」

この位置かからだと、あの人は気付いているはずだ。
サーヴァントが教えたりとか。

「アジア圏有数のクラッカー、
マトウシンジ君？。」

あ、怒ってる。
怒っているよ。
気のせいじゃない。

「ああ。
君には何度か煮え湯を飲まされたけど、
今回は僕の勝ちだぜ？。」

にしても、いいサーヴァントか。

こっちは底辺の底辺なサーヴァントだからね。
有名な訳が無いから調べるのに時間が掛かると思うのだけど。

「僕と、彼女の艦隊はまさに無敵、
いくら君が逆立ちしても、
今回ばかりは届かない存在さ。」

艦隊。
浮かぶのは、海賊だ。
あの、赤いサーヴァントが海賊。
似合うような気がする。

「へぇ、サーヴァントの情報を
敵に喋っちゃうなんて、
マトウ君ったら、ずいぶんと余裕なんだ。」

あれは、まさか私が盗み聞きしているなんて
思っても無いでしょうね。
さて、次は何を漏らすのかな。
どうやら、失態に気付いたようだ。
赤くなっていく顔。
はは、ざまぁ。

「う・・・そ、そうさ!。
あまりに一方的だとつまらないから、

ハンデってやつさ！。」

見苦しい。

「で、でも、大したハンデじゃないいか、な？。
ほら、僕のブラフかもしれないし、
参考にする価値はないかもよ・・・？。」

アホか、その価値あるし。
大体さ、なんのブラフだよ。
いい加減にしろ。

「そうね。
さっきの迂闊な発言からじゃ、
真名は想像の域をでない。」

私には、何も浮かびません。
後で、調べないとなぁ・・・。

「ま、それでも艦隊を操るクラスなら、
候補は絞られるようなものだし、
どうせ攻撃も艦なんでしょ？。」

へぇ〜〜、
流石は、ファンタジー。
アーチャーにもそれらしいものが見当たらない。
その辺に居てても、違和感が無いぐらいだ。

「艦砲射撃でもしてくるのかしらね。
どのみち、物理攻撃な気がするけど。」

流石です。
参考にします。

「う・・・。」

アホの極みだ。

「ま、今のわたしにできるのは、
物理防壁を大量に用意しておくぐらいかしら。」

あっさりと対策を立てられた・・・。
サーヴァントの力は強力だ。
クラスも隠したほうが良くない?。
調査や情報の大切さが良く理解しました。

「あ、一つ忠告しておくけど。
わたしの分析(アナライズ)が正しいなら、
『無敵艦隊』はどうなのかしらね。」

何処かの教科書に載っていた気がする。
社会、世界史の・・・・、
いつの何処だったけ・・・・??。
思い出せない。

「それは、むしろ彼女の敵側のあだ名だし?。
せっかくのサーヴァントも気を悪くしちゃうわよ。」

女って怖い。
一応は、マトリクスが埋まった。
この調子で行こう。

「ふ・・・ふん・・・・まあいいさ。
知識だけあっても、
実践できなきゃ意味ないし。」

確かにそうだけど、
知識が無いよりましだと思う。

「君と僕が必ず戦うとも限らないしね。」

負ける気が満々の様にしか聞こえない。
後ろにわたしが居る事も気付いてないようです。
って、こっちに来た。

「おまえ・・・・！。
まさか、そこでずっと見ていたわけ！？。」

「見てたし聞いてたよ。」

うわー、何こいつ。
固まっている。
そりゃそうか。

「ふ、ふん・・・どうせおまえじゃ、
僕の無敵艦隊・・・いや、
サーヴァントは止められしないさ。」

其処まで言いかけて、言い直すか。
中途半端なやつ。

「どっちにしろ僕の勝ちは動かない。
じゃあな。
おまえもせいぜい頑張れば？。」

なんだろう。
負け犬の遠吠えのようにしか聞こえない。

「・・・・やれやれ、
緊張感に欠けるマスターが多いわね。」

同感だ。
心の中では賛成した。
私の傍を通り去った。

「彼女の言うとおりだね。
あれは、聖杯戦争での情報の大切さを
全然理解してないし、解ってもない。」

やれやれと、大袈裟なリアクションをする。
サーヴァントも呆れる位に間抜けらしい。

「あんなのは偶にしか、居ないはずだけど
とにかく、調査は大切だって事が解った?。
今後も警戒に注意をするんだぞ。」

屈んで目線を合わす。
軽くデコピンされた。

なんで、私にはアーチャーなんだろう。
奇異には異例を。
私も変わってて、
彼も同じように変わっているというわけか。
どこでどう、変わっているのです??。

「はは、馬鹿はあまりしないでよ。」

深く考えないようにしよう。
それが一番なんだ。
きっと、自分にはそれがいいんだ。

本当に、そうなの?。
私にとってもそうなの?。

「ふーん、もう一度言うけど
勝つためにも生き残るためにも、
情報を得る事は大切だからね。」

念入りに言ってくれる。
私のために言ってくれているんだね。
生き残るため、解っている。

「なら、行きますか!!。」

でも、なんでだろう。
別の意味で疲れる。

2―1　打ち切れる女（後書き）

間桐慎二のカタカタ表記は怒っている印だと推測する。
なので、こんなタイトル。

2―2　重い思い想い（前書き）

真っ白。
前に書いたのに消えてる！！。
うわーーーーん

2―2　重い思い想い

アリーナに行く準備をする。
欠片とリターンクリスタルを何個か購入。
さぁて、今日も元気に自己強化。

弱い私は、何にしてもそこらの魔術師以下だ。
ショートカットでアリーナの扉がある、1階に行く。
集中を軽くしないと出来ない。
アリーナの扉に手を出す。
変哲も無い、ただのペンキを塗った鉄扉。

「大丈夫なの？。」

後ろから私に、アーチャーが声をかけられる。
その声のトーンは聞き覚えが無い。
心配、してくれているのだろう。

「平気。」

私は私だ。
ありきたりな言葉だけど、私は好きだ。
何にしても、弱いから。

「体調管理も俺のマスター、
ゆらの仕事でもあるんだから、さ。
気をつけてよ。」

私は何を考えているんだ。
何を想っているんだ。

「わかってる。」

ここでは、体調とか大丈夫のはずだ。
サーヴァントの攻撃や魔術を受ければ、別だけど。
それとか、ないです。

「なら、いいけど。」

私は、戦いに向かう。
それしか、実力の差を埋めれないから。

アリーナに入った。
敵サーヴァントの特有の殺気を感じない。

エネミー狩りに集中しよう。
礼装、アイテムはある。

アーチャーは強いね。

「面倒だよな。」

ガシャン。
銃を構える。

「サブマシンガン、乱射しちゃいまーーーーす!!。」

サブマシンガン(左手装備)×サブマシンガン(右手装備)。
顔が愉快な顔になっている。
きゃはーが似合う。
いまは、効率で行くから気にしない。

「うわ。」

穴だらけのエネミーに同情します。
と言うか、こんな事ってありなのか。

「大丈夫、これはね。
俺は銃に詳しいから！
固有武器の一つだから気にするな。」

なんだ、気にするだけ損なのですか。
がははははという、笑いがアリーナに響く。

「思い詰めないようにね。」

・・・。
年上のアーチャーにはお見通しだったらしい。
帰ろうか。

個室に戻る。
どこか、偉そうな態度だ。

「うん、こんなもんだね。」

ふむーとまた大袈裟なリアクション。
聞いてもいいかな。

「クラスを隠す気、無いの？。」

「はい？、マジでソレ、言ってるの」

意外に驚いている。
相手のマトリクスには、アーチャー？と記載されてそうだ。
隠せる物は徹底的に、がいいと思う。

「うーん、間違ってない策だと思うけど
俺に他の名で反応しろ、と言っても、ねぇ。」

反応、確かにそうです。
あーいい作戦だと思ったのにな。

「お仕事名（偽名）ならまだできるけど、
それはそれで真名に近づくし・・・。」

「うん、アーチャーのままでいっか。」

駄目だな、私。

ついつい溜息が出る。

「だね！！。」

はぁ、深刻な事もこいつからすれば、軽いのかな。

2—2　重い思い想い（後書き）

泣きたい。

3―1　解らない景色（前書き）

今の考えではＥＤと言うか、ゆらのやつで２パターンはあります。
うーーーん。

3―1　解らない景色

廊下を歩く。
すれ違うひと、ヒト、人。
人形と人間の差がよく解ってしまう。
緊迫した、殺気がこもった空気。

よく目立つ、少年が居た。
オレンジの鮮やかな色。

「おや、あなたは・・・。
　やはり、あなたも本戦に来たんですね。」

育ちがよさそうな、感情が感じられない。
いや、表情が乏しい。
自分が言うのは変だけどさ。
傍らには白い鎧のサーヴァントが居た。
性格がよさそうだね。

「言ったでしょう、
　あなたにはまた会えるって。」

私には面識は無い。
理緒、自分に面識があったらしい。
濃い何もかも自分より存在が濃い。

この張り詰めた学校には、自分はどう映るのだろうか。
いや、そんなものは私が決める。

「どうかしましたか。
　僕の名前を忘れましたか？。」

つっ！？。
気付かれたのか。
アレにも気付かれなかったなのに、気付かれた。
白のサーヴァントに射抜かれる。
視線が刺さる。

「レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイです。
　レオと呼んでください。」

どうも息苦しい。
気まずい。

「自分は黒・・・。」

「違いますね。」

即答に否定される。
気持ち悪い。
土足で踏み込むと言うやつか。

「西谷、ゆらよ。」

さらりと口に出る。
苦しい。
さっきから白いサーヴァントが私を睨む。
くるしい。
なぜ。
解らない。
なぜだ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。
どうしてだ。

「ガウェインですか？。
　ああ、僕とした事が失念していました。」

張り詰めた空気が緩む。
それでも、頭の中が熱い。

「ガウェイン。挨拶を。」

整った顔。
うん、サーヴァントは美男美女の集まりなんだね。
アーチャーは一般的な顔だ。

「従者のガウェインと申します。
以後、お見知りおきを。
どうか、我が主の良き好敵手であらん事を。」

さわかな笑顔。
綺麗に決まるお辞儀。
真面目でさわやかな白が似合う騎士。
完璧すぎる。
レオに良く似合う。
不気味なぐらいにだ。
ガウェイン、聞き覚えが無い。
ランスロット、アーサー王、エキドナ。
どうやっても出てこない。
クラスは、セイバーぽい。
サーヴァントの姿を晒すなんて、無謀だ。
勝利と言う二文字しかないのか??。

「それでは、失礼しますね。

再会を祈っています。
どうか、悔いのない戦いを。」

またお辞儀をする。
悔いのない戦い。
悔い、あっただろうか。
ちらつく情景にめまいを覚える。
見えないが、なにか、なにがだろう。
自分には、私には、生きる。
ただそれだけに思っている。

「レオ・・・！
ハーウェイが来るのは想定していたけど、
あんな大物なんて。」

なぜ、そこまでに刀のような鋭い何かを送れるのか？。
いや、自分には関係ない。
誰が、誰になんて思おうとも、自分には関係ない。

もう、いい。
ここから去ろう。
それが一番だ。
きっと、そうだ。

3_1　解らない景色（後書き）

設定が悩みの種です。
なんちゃって。

3―2　白黒不明な者（前書き）

主人公と慎二の事です。
ワカメ、お前の行動は矛盾に満ちているぞ。

3―2　白黒不明な者

あ、あの人がいる。
聞いてみるかな。

「あら、ごきげんよう。
その後調子はいかがかしら?。」

向こうから話しかけて来た。
相変わらず綺麗なヒトですね。

「逃げ回ってばかりじゃ
勝てる見込みはないわよ。」

知っています。
その事はよく解っています。

「けれど、相手の情報が得ないまま
戦いを望むなんてのは愚の骨頂。
この聖杯戦争は言わば情報戦なんだから。」

えーと、何をべらべらと教えてくれるのですか?。
返すものなんて何にもないのに。

どうしてだろうか。

「相手を倒したかったら、
向こうのクラス、技、関連情報、
とにかく出来る限りの情報を集めなさい。」

えーーーと、
私は、敵だよ。
どうして其処までしてくれるのかな。

「そうすれば、対策が取れるし
相手の戦い方も
読めてくるというものだわ。」

確かにそうですけど、
え、なんで、ここまでするの？。

「とりあえず、図書館にでも行ってみれば？
あそこは、何気に情報の宝庫よ。」

そうですか。
解ったけど・・・・。

「私はマスターだよ？。
どうしてそこまで教えてくれるの？？。」

敵なんだ。
この学校中の人は敵なんだよ。
うん、どうしてです？。

「別に。
ただあなたの方が、
勝ちやすい気がするだけよ。」

ようは気まぐれか。
それとも、アレに対する恨みか。
解らないけど、
今は手を貸してくれると言うわけね。

「ああ見えて間桐くんはゲームチャンプ。
彼が勝ち上がるより、あなたと
当たったほうがやりやすいもの。」

ですよねー。
うん、そうですねー。
これが、私の扱いなのよね。
にしても、納得だ。
ゲームと言う例えをするんだね。

チャンプというならば、
２０前後もしくはそれ以下の歳だ。
ゲーム業界？は年齢の入れ替わりが激しい
と聞いた覚えがある。
２０を過ぎた頃から腕が落ちるらしい。

「ま、せいぜい頑張りなさい。」

あ、そうだ。
忘れてた。

「すいません。
今更ですけど、名前を教えて欲しいです。
私は・・・黒井理緒。」

それが登録されている自分の名。
にしても、どうして唖然とするのだろうか。
なにかトンでも発言でもしたのか？。

「ちょっと、待って、
あなた、予選時にわたしの役割（名前）を聞いた事、
ないの？。」

えっ？。
ヤバイ、ぼろが出る。

「遠坂凛よ。
本当に聞き覚えが無いのかしら？。」

なにか聞かれる前に撤退！！。
図書室ね、図書室に行こうかな！！。
逃げるように去ろうね、私！。

「ふーん。」

［図書室］

さーて、図書室に到着。
見覚えある青に落胆した。
ウザイな。

「あれ？　こんなところで
会うなんて奇遇だね。」

なんで、こうなるのかな。
しつこい。

「なんてね。
ウソに決まってるじゃないか。」

うん。
解ってます。

「情報収集といえば、図書室で決まりだよ。
僕も、君の情報はしっかりと集めているから
くれぐれも手を抜かないでくれよ。」

アーチャーの?。
見つかるのかな。
アーチャー自身が
自分の事を底辺の底辺と自分を例えていた。
アーチャーを調べているなら、教えて欲しいのですが。

「ところでめぼしい本が見つからないみたいだね。」

まだ探しても無いのに決め付けるな。
いけない、いけない。
握り拳をやめなきゃ。

「残念ながらすでに対策済みさ。
あの海賊女に関する本は

既に隠ぺい済みだよ！。」

海賊女ってかなりの情報じゃない？。
海賊、無敵艦隊。
これだけでも絞込みが出来そうだ。

「少しでも君が楽しめるようにと思ってね。
アリーナに隠しておいてあげたよ。」

アホだ。

「最弱のマスターに見つけられるかな？。」

最弱にも生きる権利、義務がある。
勝手に言うな。
勝手に決め付けるな。

「ちなみに、君のサーヴァントは働くのに
何を要求するんだい？。
やっぱりお金？。そうだよねえ！。」

そんな事は一言も聞いた事が無い。

「そうなの？。」

ついつい。声に出してしまう。
不思議に図書室に声が響いた。

「ん？、亡霊さんな俺が
それを求めるわけ無いじゃん。」

さっと出て来て一言。
さっと消える。
いい一言をありがとうございます。

「まぁ、せいぜいあがいておくといいさ。
あはははははっ。」

なんか、呆れられた。

「じゃあね。
せいぜい頑張ってくれよ。」

「次にアリーナで会った時に
一太刀くらい浴びてくれないと

僕も退屈だからね。

もっと、このゲームを楽しませてくれよ！。」

言うと、馬鹿は去っていった。
せてと調べてみるかな。
それとも、隠した物を取りに行こうかな？。

もう少し、ここで調べようか。
それぐらいの時間があるはずだ。

3―2　白黒不明な者（後書き）

さて、次回は固有結界の話。
苦痛が腹に頭によぎるよ。

3_3　月の固有結界（前書き）

ＥＸＴでは固有結界が題材のように思えるので
ここも頑張った。

3―3　月の固有結界

調べ物。
それは、大体がサーヴァントに関する事である。
と、わたしは思う。

「で、なんで、
　アーチャーが本を見ているの？。」

しかも、その本は料理本だ。
お菓子とか家庭用品系の本がアーチャーの横に
積まれている。

「暇だし、いいじゃんか。
　こういう機会なんて滅多にないしさ。」

そういうものなのか？。
いやいや、真名が解らないように隠れるものなのでは？。
自分で言った事を実行してない、サーヴァント。

「あ、これとかいいな。」

・・・。

私から言う事なんてない。
これで指示とかを従ってくれるのなら、です。

「またお会いになりましたね。ニシタニさん。」

レオだ。
目立つよね。
容姿とか。髪とその眼は特に。

「固有結界について調べているのですか。」

「まぁね。」

私の調べている事には固有結界も含む。
私は、魔術や重要な知識について欠落している。
余計な知識は覚えているくせに、だ。
だから、調べてる。

「よろしければ、説明いたしましょうか？。」

それはありがたい。
こう言うのは本職に聞くのが一番な気がする。

「お願いします。」

「では、早速。
固有結界というものはご存知ですか？。」

えーと、たしか。

「魔術の奥義的な位置に属する。
さらに魔力の消費が激しい。
ぐらいかな。」

並みの魔術師でも数分しか維持できない。
大型の秘術。
悪魔とかなら固有結界を使える。
人間でも使えるものは少数。
だった、気がする。
頭に入りきれない。

「そうですか。
サーヴァントの中にも、
この固有結界を持ち合わせる者が
居る事は知っていますか？。」

考えると、確かにと思えた。
魔術の奥義なのだ。
奥義ならば、持ち合わせる者も居ても変じゃない。
宝具と同じぐらいの神秘というわけか。

「考えてみると居るよね。」

その位の神秘だ。
サーヴァントが習得していてもおかしくない。
妥当なのはキャスターとかかな？。

「予選で我々が過ごした学園も
固有結界なのですよ？。」

うえ、だから
記憶没収って言う条件もできたわけか。
嫌がらせにもほどがあるわ。

「予選の学校と同様に、本戦の学園、アリーナ、
そして、マスター同士が雌雄を決する決戦場。」

すごい一点張りだ。

何で其処までに、詳しいのかが疑問だ。

「これらも全て、
聖杯がその桁外れな魔力を元に作り出した
個別の固有結界なのです。」

さすが聖杯の名を関しただけの事はある。
どういう材料なのです？。
その聖杯は、どういった材料なんです？。

「あれだけの規模の固有結界を長時間、
しかも複数同時に維持し続ける事は、
現代の最新鋭のスパコンでも不可能です。」

「聖杯の魔力の規模がどれほどすざまじいか、
ご理解頂けるかと思います。」

うわー、聖杯の名は伊達じゃない。
と言う意味ですね？。
笑えない。
サーヴァントで数分。
聖杯は複数の固有結界を展開、維持。
みんなが欲しがるワケか？。

「聖杯戦争に参加した全てのマスターは
一度記憶を完全に削除されます。」

あ、予選だ。
とんでもないやり方だね。
こっちは、その予選の記憶がないけど。

「そしてまったく別の人物として、
聖杯が作り出した固有結界の中で
偽りの学園生活をされていたのです。」

まったく別の、ですか。
え、なんか嫌な予感がするのですが。

「聖杯は学生生活に時間制限を設けました。
四日間。その間に、自分に与えられた役割を
演じさせられている事に気付けるかどうか。」

遠坂凛が言っていた事は役割の事か。
有名だったのですか？？。
だとしたら、私の特殊事情に感づいているかもしれない。
ばれててもいいんだけど。

「それが、聖杯戦争参加の条件だったのです。」

へ、へぇ。
気が付くと、あんな所に居たからわかんない。
解る事は真面目に、学園生活を満喫していた事だ。

「・・・ふふ。もっとも、トオサカさんの場合、
すぐに役割を抜け出していたようですので、
演じていたという部分は当てはまりませんね。」

確かに、色々とドきつい人ですからね。
うん、赤い、いや濃い人だし。

「ちなみにフジムラ先生や
イッセイリュードーはマスターではなく、
役割を与えられたＮＰＣです。」

桜や言峰と同じと言う事か。
本当、人と喋っているのと同じ感覚なのに・・・ね。
複雑だ。
あれ、なんで、複雑と思うの？？。

「予選で役割に気付く事が出来なかった
マスターたちは、そのまま精神の死
という形で結末を迎えました。」

死んだ。
ここまでに命の価値が低いのか？。
考えれば、考えるほどに
自分が、私が、気持ち悪い。

「悲劇的ですが
弱い者には生きる余地すら与えれない。
それが聖杯戦争です。」

弱肉強食。
まさに、そんな感じだ。
だが、なぜ、そう簡単に淡々と語れるの？。
なにも、なにも、思わないのか？。

「この戦いで生き残るには、
可能な限り情報を集めることです。
それが、やがてあなたの力になるでしょう。」

なぜ、そう簡単に物をいえるのか。
私には、彼が底無し沼に見えて仕方が無い。
何かが抜けている、気がした。

3—3　月の固有結界（後書き）

こう、滲み出ている気がする。

熱くて、暑くて、書くスピードが上がらない。

下がってばっかだ。

3―4　蒼と赤の恐怖（前書き）

では行きまーーーース。

3―4　蒼と赤の恐怖

私はひとまず、階段を下りる。
一階に降りるとふと思った。
あの保健室の非常口は何処に繋がっているかを。
行ってみた。
行くと、花壇に教会。
色味綺麗な華。
噴水がまたいい。

「うわー、悪趣味な教会。
何で存在してるのやら、意味解らん。」

お前が意味解らん。

「何、その顔。
蔑まされてる感があるんですけど～。」

「気のせいです。」

まだ何か不服と感じる所があるのだろう。
ンなモン、気にするほうが馬鹿だわ。
入ってみようっかな？。

入ると、薄暗く、蒼と赤が浮かび上がる。
シスター服でもない。
何でこんなところに居るのです？。

「はぁい、ようこそ教会へ！。
君も魂の改竄しにきたのかな？。」

『も』。
と言う事は、他にも利用者が居ると言う事か。

「うわー、コレは無いでしょう。
嫌だわ。」

アーチャーが露骨に嫌な顔になる。
アーチャーも関わり合いになりたくない人種らしい。

「君、今何を思ったの？？。」

「いえ、何にも。
物騒以前の問題もあんた等にありそうだ、程度？。」

いや、かなり、関わり合いたくないって言ってる気がする。
物騒以前の問題?。
どういう問題ですそれ!!。

「いや、魂の改竄って何よ。」

怖い語呂だ。
メリット、デメリット。
効果、副作用。
改竄と言うのは、改造と同じに聞こえるのですけど。

「あら、魂の改竄を知らないで来たんだ。
ってことは貴方、本当に
素人の中の素人ってコト?。」

言い返す言葉が無い。
心が抉られる。
矢が心に刺さった!!。

「魂の改竄とは、そうだな・・・。」

「簡単に言えば、君の魂と
サーヴァントの魂を連結(リンク)させることだ。

マスターの魂の位階が上がれば、」

上がれば?。

「それだけ強く連結(リンク)させることも出来る。
どう連結できるかを決めて、
直接魂にハッキングするというわけさ。」

理屈はわかった。
副作用は・・・、この際気にしない。
何も、思わない。
考えたら、怖い事しか浮かばない。

「ま、大体は姉貴のいう通りね。
わたしがその改竄をする役についているの。
いろいろあって成り行きで、ね。」

蒼い人が姉貴??。
まったく似ていない。
似てない。
姉妹なのか?。
嘘じゃないの、それと言う疑惑だ。
私には関係ない。
関係ない関係ない関係ない。
よし、これでいい。

「とにかく、大体の事はわかったでしょう？。
魂の改竄して欲しかったら、
私に声をかけてね。」

了解です。と、頷いた。

「そこの女はまったく、
これぽっちも、カセットテープほどの
役に立たないから。」

え、この蒼い人が能無しっていうの？、赤い人。
睨む蒼い人。
なんか、殺気立ってきたーーーーーー！？。

「そういうお前はメガネ拭き以下だがな。
また失敗して、ムーンセルからの
苦情が来ないよう、注意する事だ。」

今度は無能！？？。
仲が悪い姉妹。
怖い、会話がツンケンツンケンしている。

「ちょっ、アレはマスターが
悪いんだってば！！。」

はい？。
理解の容量を超えるというのは、この事だろう。
可笑しい。
マスターが悪いって一体なにさ。

「違法スレスレで改竄ししてくれ、
って言うから
スキルを幾つか付与しただけじゃん。」

『だけ』？。
それも大概でしょう。

「アーチャー、会話についていけない。」

顔は笑顔だが、汗が浮かんでいる。
怖いのか、なんだかわからないけど。
引いているのは確かだと感じる。

「俺もついていけないわ。」

何についていけないかは言わないけど。

この空気は痛い。

「は、そのオチが、
巨大化したあげくロストでは、
笑い話にもならない。」

死亡者が居たーーー！！。
なによそれ、この赤い人に任せるのって危険と言う事か！。
いや、用量をきちんと守らない奴の末路なのか。
どちらにしろ怖い。

どーしよ、アーチャー

諦めろ。

にっこり笑顔で親指で首切るような仕草をする。
諦めろと言うのは私訳ですから、気にしないで欲しい。

「いいかな、お嬢さん。
命が惜しければ、その女の技量を、
あまり過信しない事だ。」

頷いた。
あまりにも、怖くて、理不尽で
コクコクする。
サーヴァントの後ろ

アーチャーの後ろに逃げててもいいと思うのだ。

「ま、サーヴァントの失われた霊格を
取り戻す程度にしておくコトだ。」

「はい、はい。」

まじで、怖いんッスけどね。

「早速、改竄する?。」

さて、気を改めて、行きますか。

「はい。」

解っている戦闘データは相手の攻撃力のランクは
危険である水準ではないとは言っても
危険なのには変わりない。
凡ミスしやすい私だ。
防御にも振った方がいいかな?。
うん、決まった。

「攻撃、防御に６・６でお願いします。」

赤い、何かに覆われる。
うーーーん、違和感マックス。

「うん、色々うまくいってる気がする。
スキル？戻ったから戦いで試しますか？？。」

うまくいったらしい。
良かった。
無事に済んで。
私の身に降りかかる事は無いから、ある意味他人事だよね。
巨大化するのはサーヴァント側だもんね！！。

「何を考えてるの！！。」

思わず、突っ込んだらしい。
其処までに顔に出ていたみたいな感じだ。

「何にも無いよ。
うん、何も。」

まさに他人事。

サーヴァントが消えたら私も死ぬけどね。
これから覚悟をしましょう。

「何かあるよな??。
ひとまずは、スキルの解説は自室でするからな。」

アーチャーって根に持つタイプ??。
だとしたら、嫌だ。
ねちっこい男は嫌いだ!!。

自室で端末を眺める。
スキルには投影開始(トレース・スタート)と水晶刀。
・・・。
正直意味解らない。

「一つは投影開始(トレース・スタート)。
この折れた剣を作り出して、
とかじゃなくってね、精度の上昇のような奴。
攻撃の要だと思えばいいよ。」

それを中心に戦略を立てればいいんだ。
投影ね?。
時間があれば調べよう。

「もう一つは、水晶刀の使用。
コレに関する力の解放は今は無理。
折れた剣より切れ味が上の程度。」

力の開放?。
というか、切れ味が上の程度は微々たる物。
まぁ、多用してもいいような??。
水晶刀専用スキルがあるってわけですか。

「以上で、ワカメに一泡も二泡も噴かせようぜ。」

異様に機嫌のいいアーチャーをつれて戦いに向かうのでした。

3―4　蒼と赤の恐怖（後書き）

色々長くなりました。

外伝1、どうでもいい（前書き）

自室に戻る前、教会を出た直後の話。

外伝1、どうでもいい

・・・・・。
なぜ、こうなった。
場違いだ。
教会でデート？。
いや、それ以前に聖杯戦争だって理解しているのか？。
良く付き合えるな、女子生徒。
そして、注意する老人がいた。

「教会では静かにするものだ。
君の神がどのようなものかは知らんが、
神父からそう教わらなかったのかね？。」

どうやら老人の怒りに触れたそうだ。
よく暇人でいられるよね？。
いや、その前に老人はなかなかの渋さだ。
いっそのことサンタクロースの格好でも似合うステキな髭だ。

「悪いね！
あいにくと、僕は無心論者なんだよ。」

まぁ、まぁね。
英霊にも神様の血が流れている人もいるでしょう。
だからって戦争中に暢気な事を出来るな。

女子生徒、お前らも一緒だ。

「・・・ふむ。
日本人は礼儀正しいと聞いたが、
それもそれぞれと言うところか。」

言葉の重さが違う。
あれと違って器が違う。

「去るがいい、小僧。
主を信じぬ人間に父の門は開かれん。」

いや、ここは改竄するとこでもあるからね。
あれがココを使わないようにしてくれ。

「兵士としての技術を学ぶ前に、
礼儀作法から出直すことだな。」

確かに、それには同意します。
私を横切って教会に入っていった。

「はん、やだねぇ、ロートルは
口ばっかが偉そうでさ。」

・・・。
なんか、あれに対して考えたく無い。
うーん、拒否。

「まぁ、いずれは戦う事になったら、
たっぷりと思い知らせてやるさ。」

君には無理だと思う。

と言うか、私の存在は、０なのかーーーーー！！。
誰も居なくなった花壇で叫んでいたのでした。

外伝1、どうでもいい（後書き）

勿論この後は、
アーチャー（赤銅の外道）におちょくられると言うオチ。

3―5　考察のち探索（前書き）

遅くなった理由ですか？？。
書くのが遅いんですよ。
作者が。

3―5　考察のち探索

アーチャー。
文字通り、狙撃が得意とされるクラス。
私のサーヴァンのクラスがそれだ。

さらに、有名どころだと一発で真名がばれる。
ヘラクレスならヒュドラを殺した九連斬撃。
これは、宝具級の必殺だ、と思われる。
エキドナ、怪物の母。
ゴルゴーン三姉妹もエキドナ系の血筋だ。
あればなぁ、
私の子達は最強よ。と言わんばかりの笑顔。
辺り見渡す限り怪物系のオンパレード。
固有結界らしいものがあっても可笑しくないと私は思う。
でも、死因は自分の子供のせい。

で、話を戻すが彼自身が言ったあの言葉。

『俺の知名度は底辺の底辺。』

簡単には真名がばれる事は無いということだ。
でも、投影?。
投影と言うのは、魔術?技術?。
影を投げる??。

?????????。

駄目だ。

無い頭で考えるとパンクする。
後で、必ず調べよう。

端末が鳴った。

：：第二暗証鍵を生成
　第二層で収得されたし

らしい。
うーん、今、アリーナに向かっているのですが・・・。
好都合ってやつだよね？？。
さて、行きますか。

「なーに、気合を込めているのやら。」

こいつは、人の気合を否定するのか。
大人になった餓鬼の典型的な奴だと思う。

「何を睨んでいるの～？
　おじさんは解らないのですが～。」

どういう思考回路だ。
どこでどうなっている！？。
私はビックリだ！。

「なんなんなーーー！！。」

いい年の大人がそんな事を言って軽く万歳。
思わず

「アホ？。」

「いえ、何で受けないの？。」

馬鹿にしているのか？。
ここいらでマスターの威厳をドーンと出せたらいいのに。

「眉間の皺を伸ばした、伸ばした。
なんてからかいのあるマスターなんでしょう！！。」

受けねぇ？。
お笑い狙いか？。
お笑いを通り越して、イラツキ、
そして、どうでもいいに変わって行ったよ。
問答無用に無視してアリーナの門を潜った。

「あ、アイツも居るよ。
気配がココまで伝わってくる。」

私からすれば、アイツと言ったら青いアレなんでしょうが、
アーチャーは多分違う。
アイツと言うのは存在がでかい。
＝サーヴァントになると一瞬で理解した。

「帰り際とかにブスって刺されるのは嫌だし、
相手さんが引くか殺すまでは、
帰るのは控えるか！！。」

ですね。
でも、リターンクリスタルで帰ったほうが大丈夫な気がする。

「見つからないうちに
アレが隠したと言う本を回収だ！！。」

にしても、よく笑ってよく叫んでいる気がする。
なんか、笑顔がデフォルメなのか？。
だとしたら、あからさま？ってやつか？。
よく笑う爽やか野郎ではないし、
うん、違和感マックスだ。

「はいはい。」

このサーヴァントは人生どう生きていたのですかね??。

「と言うわけで、今を向いてＧＯ!!。」

あー、アーチャーのうざさに慣れて来た様な気がする。
第二層は一層と違い、海、船の残骸が漂っている。
綺麗とは思わない。
木製の難破船がうじゃうじゃとあるから、物騒だ。
未熟な私が指示して、
アーチャーはいつものようにエネミーを払って行く。
いや、強いね。
私のせいで弱くなっているとしても、
アーチャーは強い。
胡散臭い笑顔でも、・・・私の機嫌取りもしているのか?。
思い詰めている所もあると、自分だってわかる。
でも、アーチャーのボケは、疲れる。
こう、うん、疲れるの。

「まぁ、良い処行っているじゃん。」

まぁってのが傷つく。
良いですよー、私は半人前以前ですよー。

隅から隅まで探索しないといけないのですね。
情報の価値は幾らでしょうか。

「ゆらー！。」

道らしき所を指を指す。
遠いところに広い空間がある。

「隠し通路のようだね～♪
隠し場所にうってつけ！！
さっ、行ってみよう。」

意外に上機嫌なアーチャー。
それにスキップ。
サーヴァントに振り回されるマスターってなに。
こういう関係もありだよね！！。
そうだよね！。
鼻歌を歌いだした。

「アレの事だから
こういう場所だって！！」

確かに、うん。

「ほらほら、速く！」

解ったから急かすな。
にしても、隠し通路か。
セラフも洒落にならない事をするね。
もし、隠し通路の向こうに暗証鍵（トリガー）があって、
見つけれなかったら・・・ああ嫌だ。
さてと、箱を開けますか。

「古！！。」

時が書いてある。
皮っぽい、紙だろうか。
羊皮紙というやつか。
よく考えると、英霊は昔、活躍した英雄だから、
英霊に関するものも普通の品は老朽化するに
決まっているじゃないか！！
ぼけてた。
内容は『黄金の鹿号（ゴールドハンド）』と言う船の名前。
他には島の名前や襲った船の積荷などが書かれている。
その手の修復屋に持ち込めばもっと読めるかもしれない。
アレが言った海賊女発言を考えると、

海賊の手記だ。

「何か解った？」

「解ったよ。
海賊の手記・・・だと思う。」

アーチャーに手記を渡す。
ほうや、へぇっと言う。

「真名は読めないけど、
これはいいとこを突いているじゃん。
ゆらの言った通りだね。」

よかった。
間違っていたらどうしようか思ったよ。
隠すなら、いや、自分で持って置けばいいんじゃない？。

さて、アレが私達を探す頃かも。
見つけたし、アレも私と同じ事を考えたかも知れない。
走り回っていると、あ、居た。

「チッ！！
こんな所まで探すなんて
ずいぶん必死じゃないか。」

当然だ。
差があって、
もしかしたら、サーヴァントにも差があるかも知れない。
なら、情報だけでも集めようとも思うのは普通だ。

「なによ。
あの馬鹿笑いを聞けると思っていたけど、
やっと理解したの？」

何をビクついているんだ。
敵だ。
生きるために殺す。
殺すための刃を研ぐのが自分たちだ。
こっちだって馬鹿にされっぱなしなんて、嫌だ。

「という事です。
ゆら、情報流出するとどうなるか
その身で証明して貰いましょう！！」

賛成です。
セラフからの警告が始まる。
戦闘開始。

「どんな英霊もこの通り！！」

あの時と比べて攻撃が入る。
少し安心した。
でも、アーチャー・・・・。

「どうかしたのー？
イライラするのかな？
無駄に海コンビだよね～～～。」

うわ、たしかにワカメと海賊。
海コンビだ。
イラついているよね・・・・。
だって、アーチャーだしさ。

「まったく、腹立たしいね！！」

さすが、アーチャー。
言動がすごいわ。
私でもイラつくと思う。
というか、振り回されてる。

「おい、やれ！」

何か、来る！？

「ガードして！！」

あ、ウィンクしてきた。
防御体制。
砲撃・・・艦？

「砲撃用ー意！」

でかい。
そりゃ、船だから・・・かな？
サーヴァントって出鱈目な存在なんだ。

「藻屑と消えな！」

ふぅ、ガードしていたおかげで助かった？
スキルもガードできるならしようね。
うっかりで死んだら、ならん。
とりあえず

「治す、よ。」

ヒール発動。
礼装って便利だけど、鞄の中とかに入れたいなぁ。

「助かる～。」

うん、何とかなりそうな気がしてきた。
この分なら決戦でも勝てる、かも。
数回打ち込む。
足裁き、剣、銃。
すごいなぁ、と思うこの蚊帳の外的な感じ。
・・・。
やっぱり、見てて興奮する。
でも、どこか冷めてる自分がいた。

「う、嘘だ。
この僕が傷を受けるなんて・・・！」

うまく行った。
うまく、生き延びれた。
助かった。

「こ、この程度で調子に乗るなよ。
セラフの監視もあるし、
決着は本番まで取っておいてやるよ！」

うぜぇ。
でも、確信は持てた。
こいつに勝てる。

「浸っている最中に失礼。
　戦闘してて、やっと確信したよ。」

確信？
なんだろう。

「相手側サーヴァントに関わるこの本が
　航海日誌である事。」

確かに。
でも、航海日誌は日記のようなものなのでは？
今日の海は荒れています。
ご飯美味しい。
とか、こんな感じではないのか？

「で、あの砲撃。
　乗り物に関わってて、

力を発揮できるとするなら？」

え、私。
えーーーと、うーーんと。
・・・。
あぁ・・・。

「解ったかな？
海賊女はライダーだよ。」

ライダー。
1号。
たしか、始めに出てきて、
なぜか刑事？に、敵の分類されちゃって1号呼びされて・・・。
始めの話と最終話しか見てないんだよね。
途中はどうなったのかな？

「おーーーい。
こっちを見てる？
ハイライトが無いように見えるんですけど。」

はっ！！
何をトリップしていた！！
微妙な顔なアーチャーがいた。

「まぁ、本は手に入れてし、
帰るのも有りかな。」

有り？
他に選択しあるかな。
・・・・。
思いつかない。

「この際、暗証鍵を取りに行く？
好きなようにしなよ。」

なら、取りに行こう。
あんまり、時間を無駄にしたくない。

「じゃあ、探すよ。」

「了解！任せて。」

いい返事だ。
この位の言葉ならいいのに。
絶対、こいつは性格で損してる！！

あ、あった。
水色の箱があった。
中には、うん、暗証鍵。
精神的に疲れた。

「よし、暗証鍵発見！」

元気、あるね。
こっちは、体力？はあるけど
精神力？がない。
電子世界だしね。
ココ重要。

「暗証鍵のゲットが
アリーナ探索の基本だ。
な・の・で、最優先で行こうな！！」

そこどうよ。
ゲットってのもな・の・でってとこも
可笑しくない。
あーーー、慣れてきたかもしれない。

3―5　考察のち探索（後書き）

もっと、フリーダムになった外道は楽しく毒を吐く予定。

3―6　やっとの月夜（前書き）

・・・。

どうしょう。

3―6　やっとの月夜

や、やっとの夜だ。
今日は濃厚な一日でした。
で、アーチャーは深刻げだ。
何だ、このシリアス感は怖いんですけど。

「アレ位でやっとの一太刀か。
まだまだ、力が出せないようで、はぁーー。」

「溜息をついてどうするの。
運気が下がるよ。」

実際に本当だ。
陰と陽が混ざって・・・。
て言う感じの中国思考系のものだったような気がする。
マジで雑学だな、オイ。

「マジで、ありえないんですけどーーー!!。」

何を叫ぶ。
あぁ、アーチャーに対しての扱いに慣れてきた感じがする。

「あ、でも
ゆらが情報の価値を理解してくれたなら
上々かな？。」

してくれたなら・・・・・？？
ほぉおおおおおお？。
元から、理解しているわーーーーーー！！
わざとらしいな。
わざとらしいなぁ、こいつはよ？

「にしても、俺も学校には縁があるよな。」

大きい独り言ですね。

「学校を戦いの舞台にするなんて、
悪趣味だよなぁ。」

私に語りかけているらしいです。
その言葉には同意します。
悪趣味を通り越して、良い趣味してますねーだよ。
悪い意味の良い趣味です。

「知り合いで英霊になってそうな人は居るの？。」

言うと、指を折りだした。
1、2、3、4、5、6、7、8・・・・・・!?
え、怖い。
可笑しくない。
時代はいつですか。

「反英雄になってそうな友達が一人。
英雄になっているかもが一人。」

「いやいや、指の前振りは何。
どうしたの!!。」

さぁ、という感じに首を傾げる。
うざいよ。
あぁぁあああああ、どうなってるだよ!!。
その前に否定して欲しかった!!。

「まぁね、偶然が一番だけどねー。
基準があって何かの介入あったら、怖面白じゃない?。
俺的には気に食わないけど。」

話を流された。
泣いてもいいですか。

「学校ってキライなの？。」

「嫌い。大嫌い。」

ハッキリしてるな。
どういうやつだよ。

「まずは、学生の使える金が少ない。」

はぁ？。

「ゲーム、トランプとかの趣味の品を持っていけない。」

趣味ね。
英霊だって元は人なんだから。
普通か、普通か。

「大体、学生というのは入用が沢山だ。
俺はお金に困った事が少ないけどね。
うーーん、適度に不便だったな。」

懐かしいという感じに遠い眼をしている。
学生生活を舐めてんのか。
こいつは一体・・・！。

「だが、でも、束縛されるその時間、生活の中で
どう生かすかが重要なんだよ。
金を毟り取り、グへへのアハハな学生生活は・・・！。」

よーーーく、解った。
こいつは、そこそこの不良。
こいつは、どういう神経してる。
マジで引くんですけど。
もう一度、こいつは学生生活を舐めてんのか！。

「ちょっと聞いてる？。
聞いてないなら、お開きにするけど。」

こいつはそんな生活を送っていたの・・・？

3―6　やっとの月夜（後書き）

フリーダム。
流石すぎるアーチャー。

4_1　こいつ、馬鹿（前書き）

やっと、やっと、二日後は決戦。
でも・・・・。

ＴＴ

4_1　こいつ、馬鹿

今日もいつものようにアリーナに向かう。
少しでも、強くならないと・・・。

さて、入ろう！

「つっ！！！」

あれ、なんで、開かない？
？、？、？

「うわーー、頭に直撃！
　コレは痛い！絶対に痛い！」

こいつは・・・！
足に向けて、蹴りを入れよう！
避けやがった。
この野郎、こうしてやる！
肘を尖らせて、重心を左足に
体重、速さをつけて、肘撃ちしてやるわ！
このまま腹に入れてやる。

「これはこの辺のなんやとを
書き換えたようです。
これって即興ですか？」

お腹を押さえて辛そうにする。
アーチャー。
こいつ、土壇場で腹筋に力を入れたな。
鞄でも購入できるならしたい。
いや、自分はもう、持っているな。

「にして、陰湿だな。」

「やぁ。
アリーナでの強化に、
精を出してるみたいだね。」

帰れ。
殴ろうか。
撲殺・・・・。
ダメだ。

「で、何。」

このままだと、殴りそうだ。

「黒井みたいなレベルの低いマスターに
アリーナで出会うと、イジ・・・」

「黙れ。」

我慢できないと言うのはこの事か。
理解した。
苛立ちはこの事だな。

「はっ、アリーナに入りたいなら、
2個」

はい、2個ね。
探すか。

「お前、最後まで人の話を聞け！！」

何で、無理。
あぁ、もう。

「聞く気が無いし、少しは黙れ。」

さて、教室に行くか。
鞄があればいいけどね？

〔教室〕

「・・・・・。」

鞄があった。
で、なんで、中身が礼装？？
お金が、どっさり。

「ゆらのお守りしてるみたいだよ。」

・・・。
私は子供か。
いい加減にしろ。

「なんだ、なんだ。
　お兄ちゃんに逆らうのか？。」

よし、鞄は右肩にかけよう。

両手でガッチリと持っておこう。
でも、その前に。

「物騒な！！。」

チッ！
避けやがった。

「イイ加減ニシロ。」

こっちだって、イラッとするのですけど？
文句あるのか。
無いよなぁ？
で、この教室の席には札みたいなのがある。
・・・・・。

「うわ、物騒。
怖い、怖いっと。」

なにか。
こっちだってイラ付いているんだ。
叩いてもいいはずだ。

「でも、ナイス！！
アリーナの扉の機能を
なんちゃらしてるのはコレみたいだ。」

めくれと、剥がせと？
面倒な。
でも、剥がした。

「次はアレの関係しているとこだと思うな！！。」

・・・・。
関係しているって何処？
海産物、無し。
教室、もう見つけた。
教会、あいつにはもう関係なし。
図書室？ダメだ。
アイツは・・・・・。
あっ、間桐。

「保健室？」

「正解！！」

あるかもしれない、間桐桜が居る保健室に行く。

堂々と、ドアに張ってある。
馬鹿か？
いや、確か、セラフの仮想人格。
セラフとも繋がっていると考えてもいいだろう。
あれ？

「これって、反則じゃないの？」

セラフは、正々堂々を掲げていると言ってもいい。
決戦、アリーナ内の戦闘の警告、校内の戦闘禁止はそれを指していると思う。
一つの反則をすると、二つ、三つと増えていく。
楽だから。
妨害も反則、違反じゃないのか？
戦争がついているのに、
正々堂々戦いましょうと言うルールが存在する。

「思いっきり反則だね。」

うわー、サーヴァントが言うと本当だと感じた。
サーヴァントだってマスターに合った相性になるようで、
私なんか、奇異と言われた。
こいつは異例と言われた。
・・・・。
同じ意味じゃないのか、それ。

「ペナルティーもそこそこじゃないの？。
それもどきついのがさ。」

罰を受けやがれ。
思いっきりきっついのを受けやがれ。

「にしても、よくこんなのを短時間で作れたね。
こういう面では天才なのかなぁ～？。」

なんじゃないの？
やっと、あれが敵対視しだしたわけだ。
よかった、よかった。
さて、アリーナに向かうか。

で、アレが居るわけだ。

「何を動揺しているの。」

言うと、肩が跳ねる。
ははは！！
笑えるわね。

その反応はとっても、とっても、面白い。

「は、早すぎる！！。
アイツもあんまり宝を取れてない可能性が！！。」

・・・。
はっ、こうなったら
徹底的に取りますかね。
アリーナ内にあるお宝を。

「それじゃ、行きますか。」

アリーナ内には敵の気配がしなかった。
エネミーを払うのも慣れたものだ。
サーヴァントの霊格が戻って来ているかも知れない。
戻っているとしたら欠片程度だろう。

「にして、一回戦の相手が優しくてよかったよ。」

遠まわしに弱い、甘いと言われている。
初心者の私にはいい事だ。
私には、記憶が無い。

予選の記憶も、ない。

「まーね、勝ち上がれば相手も強くなる。
これには、ちょっとお手上げかもね。」

・・・。
まぁ、そうでしょう。

「後さ、ゆら。
無駄に頑張るなよ。」

意外に弱音を吐いている。
はぁ、うん。

「駄サーヴァント。
私の願いはまだ無い。
あのときの言葉は嘘なのかしら?。」

まだ、私には願いが無い。
『君の答え(願い)の終わりまで一緒に居る事を誓うよ。』
あの言葉は嘘なのか。
本人は本音の中の本音なのだろう。

「そのつもりは無いけど・・・・。
本気にした?。」

しました。
マジよ。
文句の欠片でもあるのかな?

「本気よ。」

やや困り顔だ。
照れているとも思える顔だ。

「まぁ、ププ。」

何を笑っているのだろうか?
解らないです。
ツボに嵌ったのか。
ドツボに嵌ったのか

「ようは、無駄に頑張るな。
根を詰めるな。
いや、荷かな・・・まぁ、無茶苦茶はよして。
と言う感じな意味。」

私の魔力は、低いのかな。
あっと言う間に魔力が無くなる。
アーチャーの魔力もあっと言う間に無くなった。
さて、帰りますか。
アリーナ内に敵サーヴァントが居なかったと言います。

夜になると、月が出る。
現実では一秒とか、そんな時間だろうか。
解りやしないが。
自室に居るのは私とアーチャー。
アーチャーの顔はしかめっ面だ。

「よかったな。
アレがゆらを警戒しだした。
ほら、笑って喜べ！。」

と言っても、

「無理。」

ハイテンションで扱いにくい。

気軽なのか、お気楽なのか。
解らない。
少しでも理解するように努力せねば！

「えーー、
なんでそんなに深刻な顔するのさ。
勝てる勝負に勝てなくなるぞ。」

二ヒヒと、笑うアーチャーが
餓鬼に見えたのは気のせいじゃない。
悪戯小僧だね。

私の事を思ってしてくれるのはいいよ。
けどね、勘弁してください！！

4_1　こいつ、馬鹿（後書き）

決戦は、どう描写すればいいのでしょう。

またの期間を置いて投稿します。

遅いな、作者！

でも頑張る！

5―1　ぷっつんです（前書き）

コレが終われば、ついに決勝。
決勝を紙に書いてない。

あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
時間が、足りなーーーい。

5―1　ぷっつんです

昼だ。
なぜか、なぜか、勉強している、西谷ゆらです。
いや、黒井理緒と言う名前もあります。
はぁー、うん、サボタージュしようか。
廊下に出ても注意は無い。

「ハロー、なぜにサボりなのですぅ？。」

はぁ、なんか溜息が出てくるわ。
こいつは、よくよく
ウロウロウロウロウロウロしやがって！！
私の苦労を知っているのか。
リラックス効果も無いぞそれ。

「眉間の皺を取って！。
明日は決戦なのです。
完全な準備と遺書の準備を・・・わっ！。」

うん、鞄で殴ろうとしたのは間違ってない。
間違ってないんだ。

「大体、遺書って、

戦場カメラマンか！！。」

遺書を書いて置けば、生き残るとか、
そんな変なジンクスがあるらしい。
その関連か？　そうだよなぁ？

「まぁまぁ、マスターは脅威じゃないけどね、
サーヴァントが強力だ～～～～！！。」

黙れ。
そのハイテンションを直せ。
また殴るぞ。
宥めてるつもりか、その『まぁまぁ』っているとこはね？

「勝つのは半々あたりかな。
油断はダメだよ？。
気を緩めなきゃ、多分勝てる！。」

「其処はきっとよ！。」

はぁぁあああああ！！
こいつは、何様ですか！
もういい。

図書室で暇つぶしをしよう。
どうせ、こいつについても調べないと。

〔図書室〕

ガウェイン、あのアーサー王の円卓の騎士の一人。
甥と言う位置づけ。
アーサー王の死の原因の引っ掛け。
頑固者だね。
ランスロットを拒んだ頑固者。
私なら、
再び王のために働いてくれるのか！！と感激するところだよ。
それに、不倫ね。
不倫。
こう言うのはよくあるパターンだね。
投影についての魔術本はなかった。
・・・。
知識としての、奴ですね。
あいつ自身も自身についての情報を言ってない。
抜け目無いな。
以外に暴露もしてないなぁ！！

「なにを、歯を食いしばってるの？。」

微妙な顔のアーチャー。
ふざけんなや。

イラついとるんじゃ。
少しは黙れ。

「にしても、魔術師としての知識は皆無だね！。」

心に矢が刺さる感じがした。
痛いぞ。
コレは痛い。

「それにゆらの魔力も低いしぃ？。
そこは要努力！。
大器晩成なら嬉しいなー。」

「お前さん、黙らんか。」

私は悪くない。
こいつが悪いんじゃないの。
魔力の事だって、知らんよ。
知識も記憶も無いよ。

「たしかに何にもないよ。
だから、何？。」

無くたって、ヤルもんはやるんだよ。
間違ってるか？

「私が、マスターじゃない方が良かったか。」

マジで聞きたいわ。
そういう事もさ。
言えや、ゴラ。

「いや、呼んだのがゆらじゃないと、俺じゃないだよ。
ゆらが呼んだから、俺が来てね。
初マスターで、調子に乗っただけよ。」

初マスター。
はぁ、忘れてた。
天文学的可能性って言われた時に気付こうよ。

「あーからかい過ぎてゴメンね。」

自覚しろ。
さて、歴史の教科書でも探そうか。
たしか、それらしい記憶、というかそれらしい雑学は

教科書にも掲載されてたはずだ。

フランシス・ドレイク。
没年は不明。
世界一周をした人物。
というか、これで、真名も解るし。
ココまで調べろって。
なぜに、歴史の教科書が図書室に・・・・。
見逃すのも仕方が無い。

「夕方になった、か・・・。」

さぁて、アリーナへ行きますか。
近くまで行くと、男のわめき声が聞こえた。
明らかに、アレの声だ、

「シンジ～～。
最初に言ったはずだよねぇ？。
アタシを働かせるには何が必要かってさぁ。」

苦労していたのね。
でも、どうでもいい。
頑張れ、そして、自滅しろ。

「な・・・また金が要るのかよ！。
この強欲女！。」

その理不尽は理解できそうな私が居ます。
アーチャーのハイテンションにはついていけません。

「そうとも、アタシは雇われ海賊だからね。
詰まれた金が多ければ多いほど
やる気もでるってもんさ！。」

なんと言う、単純明確。
ココまでに、ハッキリしているのは
好ましい。
それと比べると、アーチャーは・・・・。

「ん、俺のこと？。
大丈夫だって、
あんなに、うん、お金に執着はしてないよ。」

「執着は、ねぇ？。」

言うと、軽くうろたえるアーチャー。
魔術と言うのはお金が掛かるものなのか？
その辺の知識も無い。

「しにても、
亡霊は亡霊らしくが一番なのにな。」

何を考えたら、そんな答えに行き着くの？
それを聞くようなマネが出来ない。
なぜだろう。
知るのが怖い。

「おや、お譲ちゃん。奇遇だねぇ。」

やっと、こっちに気付いた。
中々のさっぱり豪快な姐さんだ。

「黒井！。
お、お、お前・・・盗み聞きなんて卑怯だぞ！。」

黒井。
うん、自分の名前だね。
あっ？、文句が御座いますか？
睨むと怯む、いい弱虫君。
その根性が気に食わない。

「い、いや、まあいいや。

聞いての通りさ。
アリーナの第二層に財宝を出現させたんだよ。」

「で、何。」

凄いですねー。
このまま、前に進んでやろうか。
こいつは私の心とかを踏み荒らしている。
当の昔に逆鱗に触れている。

「僕のサーヴァントはな、
お金を払えば、
それだけ強くなるからね！。」

そうやって、サーヴァントを強化していたか。
別の強化の仕方もありっと。

「まあ、財宝が欲しかったら、
君も取りに来ていいんだぜ。」

勝手に言っとけ。
こっちはこっちで掠め取るから。

「へぇ、ずいぶん余裕じゃないか、シンジ。
そいつの目の前で

財宝を全部取っちまおうって算段かい？。」

らしいよ。
私は別にお金あるから関係ないけど。

「いや、
どうしようもない捩じれ曲がりっぷりだ！。
小悪党にもほどがある。」

「其処には同意するわ。」

本当に小さな嫌がらせしか、しないからね。
だから粘着質は嫌い。

「小悪党って言うな！。
この性悪サーヴァント！。」

ホントに似合うコンビだ。
海コンビだし、青と赤で見栄えもいい。
コントですか、としか言いようの無い会話だ。

「じゃ、じゃあな、黒井。
何なら待ってやってもいいぜ。」

待つ気が無いのに言うな。
もう、思考停止してもいいですか。

「同時に取り始めたって財宝はきっと、
僕らが全部取っちゃうに決まってるからさ！。
あっはははは！。」

「お金を与えるとやる気が出るねぇ・・・。
中々いい趣味の様子で。」

やれやれと額を押さえるアーチャー。
呆れ顔が前面に出ている。

「そもそも、亡霊は亡霊らしく居ればいいんだよ。
これは横取り確定だね。」

そうですか。
私は鞄を弄くった。
何かいい装備、ではなくいい礼装はないかな？
あった。
スパイクが付いた靴。
効果は足が速くなるとか。
入ったら即効で効果発動させよう。

「それって、鬼畜仕様じゃない。」

もしかしたら、思いっきり追い抜けるかも。
で、なんでアーチャーが礼装の効果を知っている？
まぁいい、アリーナに入ってすぐに発動させた。

5_1　ぷっつんです（後書き）

イラツキが溜まって爆破。
それがこの事態。
ちょっとは、自粛に入ります。
コレは切れるだろう・・・。
次回に続く。

5_2　鬼畜仕様です（前書き）

ふぅ・・・。うまく行かんとです。

5―2　鬼畜仕様です

なぜか、この靴の事を鬼畜と言われました。
財宝は私が全部頂きます。

「はん、来たか。
大丈夫、黒井が強欲だって事は
他の奴らには内緒にしといてやるからさ！。」

「いい加減にしろ。
決まりも守れない軟弱ワカメ野郎。」

物を投げなかった私をほめて欲しい。
隣からすごい眼で見られていますが、ナニカ？

「な、なんだよ。
黒井のくせに、どうせ僕が勝つけどね。」

そう言って走る。
でもね。
馬鹿を言うな☆
スタートから走りの速さまでずるいんだよ。
鞄から水晶球を出して
投げました。

勿論助走をつけてですが、なにか。

「いまさっき振りだね。」

このとき、私は笑っていたと思う。
転んだらしく、思いっきり、床と顔面キッスしている。
きもい。

「なんでだよ！。
有象無象なお前に、この僕を！！。」

ちくっと、頭が痛む。
何処に頭が痛むような事があるんだ。
痛い、痛い、痛い、痛い。
あの時よりも痛い。

「格の差を見せてやるよ。
おい、エル・・・ライダー、行くぞ。」

アレの顔を見る余裕すらない。
痛い頭を抑えて、前を向く。

「まったく、仕方がないね。
まだなーんにも、貰ってないけど
コレも仕事だ。」

今はそれでいい。
勝てば、ターンオーバーでもすれば
相手は引いてくれるだろう。

「ゆら、辛いと思うけど
指示を。」

解ってる。
では、さっそく。

「投影開始（トレース・スタート）」

其処からしばらく打ち合って行く。
アーチャーのあのサブマシンガンは
何処から取り出しているのかが気になる。
疑問です。

「亡霊は、亡霊らしく
無欲で居ろよって！！。」

「はっ！
知ったこちゃあないね！！。」

売り文句に買い文句。
これは、仲悪い。
撃ち合いはまだ続く。

「水晶刀を。」

それでなくても、今は防御力だ。
万が一に備えないと、判断ミスで
スキル、コードの一撃でチーンとかは絶対に避けたい。

「了解。
コレが俺の一の刃！！。」

最終日の今日だ。
多少の漏れはいいと思う。
水晶刀専用スキルは使えれないけど
僅かに防御力が上がるなら使用が一番。

「良い品を持ってるねぇ！。

寄越しな。」

・・・・。
価値があるんだ。
私は観賞用ぐらいの利用法が浮かばない。
何かの作品？
何に使うの？？
攻撃力は少なそうだけど・・・・。
防御の方向かも知れない。

「無理ドゥ。」

からかう事も忘れない。
ほんとに、こいつは変わらないな。

「お前のサーヴァントはムカつくな！！。」

仕様です。
そちらも、資金の遣り繰りに苦労している様子で。
なんでかな、疲れたよ、パトラ・・・。

「それは死亡フラグ！！。」

「突っ込む暇はあるのね！！。
ちゃんと戦え、若白髪！。」

なんとまぁ、生易しい視線がして来た。
セラフからの強制終了で何事なく向こうが帰っていった。

同情されました。
そんな気がします。

もちろん、残り５つの財宝も回収しましたよ。
その時のアーチャーの笑みは悪顔でしたといいます。

時刻は夜。

お話の時間です。
アーチャーははしゃいでいる。
なんせ、大量のお金を手にしたのですから、はしゃぐのでしょうね・・・。

うざいです☆

「明日はついに決戦のお時間ですねー。
いろいろ済んだ？。

明日は、情報の整理に諸々の下準備を念入りに！！。」

解ってるけど、勘弁して欲しい。
性格の相性とか悪いかもね。
こっちが悟りとか開けそうで怖い。
こいつの主成分は我中なのですね。
確定！
有罪（ギルティ）！！

「もしもし、聞いてますぅ？。
ガンスルーだと俺、傷ついちゃうー！。
えっと、聞いてる？。
おーーーい、駄目だこりゃ。」

コレぐらいは許せ。
いいじゃないか。
何処かの誰かさんのせいで、かなり心が痩せる勢いです。
罰は受けないです。
つか、黙れ。
諸悪の根源め。
私が疲れる大体の原因はお前だよ！
睨むと、目を逸らす仕様。
こいつは、何時か絞める！！

5―2　鬼畜仕様です（後書き）

コレぐらいの仕返しは許してくれるはずです。
後半はギャク化した気がするの。

6_1　決戦日の今日（前書き）

タイトル六文字の縛りがきつく感じてきたよ。

6_1　決戦日の今日

コレは夢だと、私は気付く。

「うん、便利だね。
その魔眼は、羨ましい！！。」

声だけの再生らしい。
前もそんな感じで、心境、思念が流れてきたけど
今回はなさそうだ。

「変な方角に思いつくよな。
でも、安心して食べれるからいいけど。」

困惑の色が濃い。
かなり声が濁っている。
戸惑っているか。
うん、誰の話ですか。
いやいや、なんでそんな壮大な夢を見ています??

「食中毒菌付きと安全食事の差を見せて、正解だわ！！。」

うまうまと言いながら、食べる音がする。

乾いた笑いも僅かにする。

「俺の魔眼は、もっと別の方角に特化しているに。
安全な食事は良いのは解るけど。」

「毒茸も食べれるし、魔眼様だわな！！。」

何やってるーーーーーー！！
いや、何処から何処まで突っ込めばいいですか！
何の魔眼ですか！！

「あ、次の相手を見つけたよ。
後で殺そうか。」

急に途切れる声。

私は目覚めた。

「何がしたいのよ。」

起きると思わずには居られない。
なんだろう。
始めとの差がひどい。
最後の会話でシリアス、真面目成分があったけどさ。

「おはよーーー！！。
今日は決戦日。
念には念をきっちりガッチリしようねーーーー！！。」

座っていますか。
思わず、首に巻いていたマフラーをアーチャーにかける。
眼が点になったアーチャー。

「首、絞めていい？。
死なない程度に絞めたいな。」

「あ、ゴメン。
やりすぎたわ。」

ならいいや。
マフラーを奪う。

微妙な顔した、アーチャー。

「神経とか図太いわ。
順応してきてるよね、そうだよね！！。」

知るか。

「さて、情報を整理しますか。」

「ですねー。」

さて、あの女サーヴァントの武器は木製の銃である事。
確かマスケット銃。
私の知る外国の年代ものは
マスケット？以外ない。
興味はないし、大体は木製もあると言うのを覚えていればいい。

名前を間違えている気がする。
大体、マスのとこがマッスだった気がしてきた。
マッスケト、マス、マス、マスカット？
最後は絶対に違う。

そしてアレの発言の海賊女。
戦艦による砲撃。
よって、ライダー。
アレの発言も確かに、ライダーと言った。

情報が集まりだすと嫌がらせをして来たチキン。
遠坂凛が言っていた『無敵艦隊』
確か・・・、火の付いた船で突進したという話だったような？
後、私のアーチャーとアレのライダーの相性、最悪。
お互いに気に喰わない。

そして、真名はフランシス・ドレイク。
教科書の通り、彼女は世界初の世界一周を成した英雄だ。
うん、ＥＸの開示になった。

「おお、これでまた一歩進んだね。
さてと覚悟を決めたら、あのいけ好かない神父のとこに
行こうな。」

自分でいけ好かないと言うか？
まぁいい。
教室にいかないと。
勉強をするというのが、決まりなのかね・・・。
泣きたい。

勉強はつまらない。
ぼーーーとしていたら、終わったという。

「いよいよ・・・む！」

あーー、びっくりした。
思いっきり、鞄で殴りそうだった。

「長いから、短く。
できれば、ノンブレスで頑張って。」

言うと、ごほんと咳き込む言峰。

「いよいよ決戦の日となったが
準備は整ったかね？。

全ての準備が出来たら
私の所に来たまえ。
購買部で身支度をする程度は

まだ、余裕がある。」

ちっ、ノンブレスじゃないか。
ささっと去る神父。
覚悟は決めている。
と言うか、決まっていた。
死は確実に存在する。
あのモノクロの死体になるものか。

死ぬなんて、いやだ。

と言う事で、購買部に直行。
エーテルの欠片を5個。
リターンクリスタルも3つ。
決戦後のアリーナ探索のためよ！
誰に突っ込んでいるんだろう・・・。
焼きそばパンとカレーパンはぼったくりだと思う。

「終わったー？。」

「まだ。」

さっきからずーと出て来てる。
ある意味、ウザイ。

「そんな顔は困るぜ。
て、言うか、マスターとかの気配は皆無だし
いいじゃん。」

それで済ますな！
教会に行って、腕力に全振り。
考えているつもり。

「アーチャー、スキルは腕力依存なのよね？。」

魔力依存だとしたら、困る。
こいつのステータスは平均的、伸びやすい？
普通ぐらい伸びるより少し上がりやすい行った具合か？
生前は神秘に関わっていたような気がする。
上がりづらいのは、幸運だけど・・・。
どうかしたの？

「そうそう、腕力依存。」

よし、コレでよし！
後は、一階で言峰を探せばいいんだっけ？

「ようこそ、決戦の地へ。
身支度は全て整えたかね？。」

機会のような無機質な声。
静まり返った校舎によく響く。

「扉は一つ再びこの校舎に戻れるのは一組。
覚悟を決めたなら
闘技場の扉を開こう。」

全ての準備は済んでいる。
後は進むだけ。
後ろを向く。
アーチャーが居る。
どういうか解らないけど、笑っているようで・・・。
はぁ、自由勝手なサーヴァントなことですね。
再び言峰のほうを見る。
行くか。

「出来ています。」

今は、欠片の覚悟でいい。
死にたくないも、戦う意味になるはずだ。
絶対に生き残ってやる。

「いいだろう、若き闘士よ。
決戦の扉は今、開かれた。
ささやかながら幸運を祈ろう。
再びこの校舎に戻れる事を。
そして、存分に殺し合い給え。」

何処が存分にだ。
ふざけるのもいい加減にしろ。
それでも、巻き込まれたと言っても
私は参加者だ。

進まなければ、死あるのみなのだから。
二つのトリガーが嵌められて、
校舎の扉がエレベーターの扉になる。

うん、行くか。

6_1　決戦日の今日（後書き）

さてと、頑張ります。
この話で２０００文字越え。
きついのだ！

エミー道場！！　1（前書き）

間に挟むぜ、エミー道場！

エミー道場！！　1

何処となく、道場あり。
と言うか、貸切の弓道場である。
月の電子世界にある弓道場とよーーく似ております。

「ハローーー！！
みんなは元気かなぁぁぁぁあああ！！
俺、現在アーチャーなスナイパーでーす！」

そんな中で、ハイテンションなこの作品のサーヴァント、アーチャー。
黄色の肌と白い髪が特徴のサーヴァント。
眼の色は琥珀色だ。

「お前は誰だ。
なんで、こんな道場に私も居る？」

一応、この方が皆さんが知っている、赤アーチャーです。
彼に遠慮してスナイパーと名乗っている様子です。

「へぇい、簡単ですぜぃ！！
作者様の召喚です」

この道場ではご都合まっしぐら、及び、ギャグもどきさせて頂きます。
というか、
外道様、スナイパーが少し譲るなんてちょっと驚きっす！！

「作者は、あの旧型ブラウン管テレビか。」

レトロが好きです。
事実、田舎に超旧型があります。
アンテナテレビがあります。

「まぁまぁ、作者の語りには「」が無いからねー。
楽っちゃ、楽よ？」

何気に毒吐き！！
ナレーターな作者ですよ！

「・・・。付いて行けん」

「さーーーて、この二人を無視って言い訳道場の始まりよ！」

はは、うん。

「やめてくれ」

そうだよ。
せっかくの出て来れないＥＴＲのアーチャーを召喚したのに、勿体無い。

「どうでもいいじゃん。
作者、覚悟！！」

はぁーい。

言い訳道場始まるよ。

第一。

『丸っ子丸っ子。
丸ーい、丸ーい！！。』

コレは、原作重視のためです。

「へぇー、意外だわ」

一応は、物語じゃいこのコーナーでは普通？な形式でやってるの！
だから気にするな！！

「読みやすく、原作の風景を崩さないようにですか。
見えないとこで地味にやってるね！」

いや、間違え指摘（誤ではないけど誤）されたくないし。

「それもそうだが、私はどうなるんだ」

安心して、君とは違う存在な君がこの物語の後で活躍予定だから。
さり気無く顔色も悪いよ。

「君たちのせいだと主張する」

「もう、眉間の皺を伸ばせ！
それだから歳が老けて見えるんだぜ！！」

それを言ったら、もっとー疲れるからね。
いい加減にしてあげてね。
はい、胃薬。

（被害者が私でない私なのか。
同情した）

あれ、受け取らないんだ。
じゃあ、ドジっ娘に送ろうか。

「そんな感じにエミー道場完了！
ま・た、来・て・ね？」

「やめろ」

いえ、まだ終了しません。

「なんですと！！」

ふふふ・・・、朝の５時３４分から書いた、
２時間２１分３７秒掛かった傑作。
そして、下書きの紙の事を考えると３時間は絶対かかったと明言する！！
妄想！、無双藤姉。
画像はアーケードのキャラ選択時の画像と言う事でヨロシク。

>i335593|2328<

「ロングなんだ」

「なんとなく、似てなくもないか・・・」

刀を持たせています。
やっぱり、剣道有段持ちだし？

流石、えみや様。いい性格しています！
に出て来た藤姉の戦闘着です。
タイころを見て描いたので、似てないといわれても仕方ないです。

「ん？、ピアスしてないのか？」

はい！
してないです。
これの引っ掛けはテレビでしていた都市伝説を見て
ピアスを開けるのを止めたと言う設定です。

「迷信でしょ？」

迷信でも、背筋が冷えます。
そう言う事で。

それと、この藤姉のテーマソングは
Ｆａｔｅの第二オープニングと勝手に思っています！
エミーｚのテーマソングは

Ｆａｔｅの第一オープニングと思っています。
流石に実名は避けています。

「ですか」

ですです！
ん？、テンション低いね。

「意味わからん事を言われても
俺らには解らんとです。

えーと、Ｆａｔｅって言うアニメのって事？
それとも、ドラマ？」

あ、そうか。
君らには解らないんだ。
でも、凄いと思うぞ。

「はいはい」

「私は蚊帳の外か・・・」

どんまい！
ごめんよ。（笑）

6_2　敵意の境界線（前書き）

頑張ったけど。
うん。

6―2　敵意の境界線

広いと思った。
仕切りがある。
向こう側には、海コンビがいた。

「なんだ、逃げずにちゃんと来たんだ。
　ああ、そういえばそうだったね。
　学校でも生真面目さだけが取り柄だったっけ。」

生真面目か。
私が？
解らない。
予選の記憶が無いし、過去の記憶も無い。
何を言われても困る。

「でもさ、学校でも思ってたけど、
　空気読めないよね、ホント。
　せっかく僕が忠告してやったのに。」

聞きたくない。
何を聞いても自分は思い出せない。
でも、それでいいのか？
それでいいの？

「悪いけど、君じゃあ僕には勝てないよ。
どうせ負けるんだから
さっさと棄権すればよかったのに。」

自分の問いよりも、
こいつの言葉は馬鹿にしている。

「あんたには、勝てるわ。」

絶対。
沢山の願いがあの死体にもあった。
あんたはそれすら馬鹿にしている。
何をしても中途半端な妨害。
だったら、堂々と貫き通せよ。
だったら、妨害も何もするなよ。

「何も、知らないのね。
戦いに負けたら死ぬ。
その覚悟は持っているの?。」

何を聞いているのか、今ひとつ理解できない。
覚悟が在るの?
何の?
生きるために

誰かを踏み台してまでに叶えたいものが在るの？

「あんたは自覚しているの？。」

在るの？無いの？
答えて。

「呆れを通り越して哀れだよ。
・・・そっか、分不相応の力を手に入れて
僕に勝てるとかドリームを見ちゃったのか。」

答えになっていない。
哀れって、何それ。
あんたは知っているでしょう。
私よりはるかに、知っているでしょう！！
ハッカーの行為を
クラッカーとしての知識を
予選の記憶も
自身の記憶も
あるでしょう！！
自分に無いものを持っているでしょう！

「ゆら、落ち着いて。
深呼吸をして。
心は熱く、頭は冷静に、だよ。」

落ち着いてられない。
ココまでに死んでいった人たちを馬鹿にしている。

「おい、そこのサーヴァント。
お前からも言ってやれよ。
諦めたほうがいいってさ。」

今、殴れるだけの距離があったら
殴れているのに！！

「なーんにも理解していない男だな。
安心してもいいよ。
あんなのなら、勝つのは簡単だよ。」

肩を軽く叩いてくる。
それでも苛立ちが収まらない。

「な・・・！ぼ、僕になんて口を！。
サーヴァントの分際で！。」

それでも、アーチャーの眼は冷めていた。
睨むと言うわけではいない。

アレに対する眼はなんだろう？

「確かにサーヴァントは道具だよ。
使い勝手の良い道具だ。」

それなりに真剣な顔。
でもすぐに笑顔に変わる。

「でも、それ以前に亡霊さんだぜ？。」

何を思って、笑顔で言えるのか？
気が付けば苛立ちが収まっていた。

「アハハハ、言われちまったなぁ、マスター。」

何処が、言われちまったに入るのだろうか。
はぁーー解らない。

「お、お前！どっちの味方なんだよ！？。」

「そりゃ、アンタに決まってるだろ。
アタシはアンタの副官だよ？。

金額分はきっちり働かせてもらうよ。」

解りやすい。
うちのアーチャーにその素直さをください。
口が悪くてもいいから、
母性のある世話好きなサーヴァントがよかったよ。

後はただ、向こうのやり取りを眺めるだけだ。
次第に、エレベーターが決戦場に着いたようだ。
私にできる事は戦う事だけだ。
さっさと、降りよう。
後は、なんとでもなる。

「んにゃ、
かなり細かい創りの闘技場ですな。」

木製の船。
暗い色の海。
海組に合う闘技場だ。

「う～ん、
覗き見とか無いと言うのは快適だ。
俺たちって魅力が無いからね！。」

はぁぁ、疲れた。

脱力が酷い。
私のためなのですね？
なのですよね！
おーい。
向こうも色々と煩い事になっているみたいだ。

「さて。」

合図だろうか。
アーチャーの言葉でこちらを見る、ライダー。
お互いに歩く。

「嘆いても、コレは勝負。
泣き事はね。
厳禁だぞ！！。」

テヘッと舌を出して、イラっとする顔。
すぐに真面目顔に戻る。
剣を突き出し、相手は銃を構える。
決戦のハジマリだ。

「ちゃちゃっと消えろ、亡霊さん。
その過ぎた欲を捨てろ。」

どちらも睨む。

「なんて馬鹿な事を言うのやら。
アンタが消えな！。」

戦いが、始まる。
真剣度もこの突き刺さる気配も何かも違う。
覚悟は無い。
でも、生き残ると決めている。
生きて、記憶を知るんだ。
私が私である確かな記憶を。
私が自分である確実な証拠を！

「海賊業もお仕舞いにして、
沈没して溺死しろよねぇ！。」

「はっ、だったら縄で巻いて
鮫の餌にしてやるよ。」

売り文句に買い文句。
仲が悪い。
ハッキリと言って、仲悪い。
始めは攻める。

「来るなって、さ！」

悪態言いつつも手を動かす。
やっぱり、サーヴァント同士の戦いは凄い。
何がって言っても
技と技の競い合い。
もしかしたら、力と技になるかもしれない。
魔術と力にもなりうる。

「何がだい？。
　それにしても、あんたは何者なんだい？。」

？？
アーチャーの存在はそんなに奇妙なの？
アーチャーの真名は知らない。
だけど、だけど、『無銘』に近いのだろうなぁ。
唯でさえ、知識は無い。
雑学な知識は歩けど・・・。
そんな知識より、もっと記憶が欲しい。

「俺は俺だよ。
　私利私欲に頑張った残骸だよ。」

よくも余裕でそんな事を言えるな。
表情がコロコロと変わる。
笑顔も入れて器用に戦う。
・・・。

うん、相手はイラ付いているのいるね。

「無欲な男だねッ。」

「うん、
俺も強欲な亡霊、残骸は嫌いだよ。」

同士討ち。
打消しや、同じ攻撃に起きるアレ。
同時撃ちと変換すべきか？

「投影（トレース）・開始（スタート）」

負けれない。
負けられない。
それでも、生きる。

「便利ダントツ、水晶刀！。」

あっ、ヤバイ。
スキルだ。
あの大砲だ。
やっぱり、時間を待って

相手がガードの時に水晶刀にすればよかった。

「すぐに、回復すれば良いよね？。」

うん、それで良いや。
我慢してね。
負けるとか、嫌だよ！

「砲撃用ー意。」

大丈夫、大丈夫。
まだ、まだ、大丈夫。
残る残る。

「藻屑と消えな！。」

大きな砲台。
私の体は硬直する。
大丈夫。
大丈夫だって。

「きっつ！！。」

怖かった。
ほっと、息を漏らす。
けっして溜息ではない。
溜息は不幸になるという思想は
中国辺りが発祥。
陰と陽が混じるからとか、らしいけど。
とにかくだ。

「直すよ。」

「あいさ。」

直すところで相手からの舌打ちを聞く。
こいつは、今なんと思っているのかが気になる。
ちょっとづつ、削っていく。
気の遠くなる作業。
危険になれば回復、もしくはアイテム使用。
中々倒れない私たちを見てどう思うかは簡単。

しつこい。
凡人のくせに、なんで、ここまで食い下がる。

あと少しで、相手は、宝具を出してくる。
痺れが切れる。
感だけど。

「シンジ、そろそろ勝ちに行っていいかい？。」

今、ハッキリと聞こえた。
回復はよし。
後は、ガードの選択をすればいい。
その後にも回復選択すればさらによし。

「ああ、見せてやれよ、エル・ドラゴ。僕の力の程ってやつをさ。」

アーチャーがこちらを少し、見る。
視界の端の端に私が映ったっと思う。
大丈夫。
なんとかこっちで指示をする。
だから、心配しないで。
そういう意味を込めて、頷いた。

「野郎共、時間だよ！。」

大量の船が出てくる。
派手だ。
こんなの、大量の魔力を食らうじゃないか！！
なんと言う火力。
予想するだけでも、恐ろしい。
ライダーが船に乗り移る。

「嵐の王、亡霊の群れ、ワイルドハントの始まりだ！。」

結果を言うと、耐え切った。
すぐに回復。
相手は、止めをさせなかったのに
うろたえていると思った。

「かぁーっ、ラム酒より効いたぁ～！。」

は？
お酒を、飲んでいたの？
・・・・。
ご苦労様。

「こりゃ、足腰立たないかも」

お金が掛かるサーヴァントなんて、嫌ですね！
そんな、ラム酒発言にアレは慌てて喚いている。

「って、酔っぱらってるのかよ、おまえ！？。」

ラム酒より果実を食べろ。
生果実を食べろ。
船乗り病にならず、予防できるぞ。

「戯言はいいけど、大丈夫かな?。」

一閃。
ライダーが倒れ、私たちが勝ったと解った。

6_2　敵意の境界線（後書き）

次は、無感の葬送曲
すらっと出て来たタイトル！
一応、マメ知識は一話に一つを目指しています。

6_3　無感の葬送曲（前書き）

冷たい対応なのはこいつには仕方が無い。

6―3　無感の葬送曲

アーチャーの背中が大きく見える。
ライダーには肩から腹までの大きな傷。
深い傷。
吐くと覚悟していたが、無かった。
以外に自分の心は冷え切っていた。

「見ときなよ。
　アレが敗者の姿だ。」

喚いている。
煩い。

「な、なんだよ！！。
　て、て、天才の僕がなんで
　こいつに負けるんだよ！！。」

見苦しい。
自分のサーヴァントにまで文句を言い出す。
突如、彼は、自分の友人らしい彼が
指から足先から黒色に塗り変えられていた。
サーヴァントも同じように。

「どうしてだよ！。
どうして、現実の僕も死ぬって解るんだよ！。」

これが、敗者の末路。
理解した。
私が勝ったのだ。
去ろう。

「待てよ。
待ってくれよ！。
僕はまだ、８歳なんだ。」

もういい。
私は、このアリーナから校舎に帰った。
戻ってきたら、遠坂凛が居た。

「どうだった、見苦しい最後だった？。」

なぜ、そんな、
どうどうと聞いて来るのかが疑問に思う。
多くのマスターに、帰還してきたマスターに
聞きまわっているのか？

「はぁ、よく解らないっていう面構えね。

そんなのだったら
次は負けるわよ、黒井理緒さん。」

私の、名前。
調べたらしい。
私のデータを検索したようで。

「で、痴漢少女は何を忠告しに来たのさ?。」

一瞬で真っ赤になる。
・・・。
アーチャーにとって遠坂凛は格好の獲物らしい。
弄りのが付きますが。
ぷっっとついつい笑う。

「笑うな!!。」

アーチャーが、私を引っ張る。
壁に、小さなヒビが・・・。
アーチャーは私も巻き込む気が満々だったらしい。
かすりが無かった。
でも、横切った勢いある空気が未だ、頬に残る。
スパイクの付いた靴。
礼装だが、思いっきりにアーチャーの足を踏む。
さっと足が移動する。

アーチャーの顔は、
ムカつくぐらいの晴れやかで最高の笑顔のでした。

「残念でした〜〜！。」

おいでーと、手招きする馬鹿。
よし、こいつにはサーヴァントの常識を教える必要がある。

「待てーーーーー！！。」

こいつに一泡も二泡も吹かす！
絶対に！！
絶対にだ！！

「はぁ、まさか
あのアジアチャンプに勝つなんて。」

腕を組む。
顔を伏せて、考える。

「どうにかして、
彼女のデータを調べ上げないとね。

あのサーヴァントも。」

しかしながら、
さっきのやり取りに溜息を吐く。
何度も言うが、
彼女もアーチャーの弄り相手なのだ。

ふぅ、と自室で溜息を漏らす。
今日を乗り越えた。
今日も生きている。
・・・。
私は、ここに居る。
手を窓にかざして、窓越しの月を見る。

「うつですか～。
脱力ですか～。」

脱力ですと返したい。
こいつは、何がしたい。
まぁ、罪悪感や不安が薄れる。
私のためにあのムカつき、からかい言動を
繰り返したりしていたり？
いや、楽しみたいだけだろう。

「無視ですかー。」

そうですけど、何か。
明日からの戦いが怖い。
先の見えない泥沼な海だ。
私の願いはない。
今を生き残るというのが、私だから。
願いのある、芯のある参加者(マスター)が相手だったら？
考えれば、怖くなる。

「まぁ、でも、
明日からもじゃんじゃんやっちゃうぜ。」

馬鹿に明るいサーヴァントに励まされるとは
中々複雑な事。
もう寝る！
こんな本音、アーチャーにばれたら何を言われるのやら！

6_3　無感の葬送曲（後書き）

和やかな終わりです。
確信して仕掛けているか、
それともなにもなく言っているか。
どちらなのでしょうね、こいつは！！
この二人のやり取りが好きです。

7―1　喜んで、驚き（前書き）

自然な会話になっているといいなぁ。

7―1　喜んで、驚き

なにも、思わなかった。
むしろ怒りが一番、表に出た。
にしても遠坂凛はなにがしたかったの？
アーチャーのあの弄りは定番化したね。
・・・。
遠坂さんには同情します。
今のままでは、負ける。
と、忠告された。
親切なのかなんなのやら。
アレのように中途半端じゃないことを祈ります。

「うーん、少し深刻そうな面構えだな！。
今のところは生き残りたいでいいんじゃない？。
答えなんてその内にさ、得られるだろうし。」

この英霊は、答えを意味を最後に見出したのだろうが？
いずれは答えを意味を得られると、アーチャーは言う。
断言している。
自分の、私の、答えを見出さないとね。
なんというか、カッコ悪い！
こいつが見出せたのに私が見出せないなんて、嫌だ。
絶対に負けたくない！

「それに、俺を呼んだよね。
よく似た性質を引き寄せるのが世の常！

俺は・・・しつこいし、粘っこい。」

迷惑だな、その性質というか、性格。
世の常ってそういうものか。
その例を見たことあるのか。
気になる。

「それが俺をここまで駆け上がったものだ。
俺と一緒だと思うしね！。」

笑いながらケタケタと言う。
どこか、失礼な感じがするけど。
自分はそこまでして、生き残ってもいいのだろうか？

「コロコロ、顔色が変わるねぇ～。」

プニプニと、ほっぺを抓られる。
プニプニとプニプニと触られる。
耐えられません。

「うわ、平手ですか！。危ない危ない。」

慰められている気がして、嫌だ！！

大丈夫だ。
このサーヴァントと居れば、
きっと、大丈夫だ。
端末からの電子音が響く。

：：2階掲示板にて、
次の対戦者を発表する。

「お、いいタイミング！！。
言って来い。」

さらっと、消える。
行きますか。
教室を出て、掲示板を見る。
対戦者は・・・

マスター：ダン・ブラックモア
決戦場：二の月想海

「ふむ。
君か、次の相手は。」

思わず、後ろを向く。
あの時の老人だ。
ガン無視されて、存在感ゼロです。
と思ったあの時の。

背筋もぴんとしている。
肩も綺麗な横一直線だ。
ココで言うが、
カバンを抱える肩は毎日交代、右、左、と言う順で行っています。
右が左が偏っている人は整骨院に行く事をオススメします。

存在が、大きく感じた。
薄っぺらい自分と違うと思った。

「若いな。
実戦の経験も無いに等しい。」

その通りです。
記憶喪失ですから。
意地でも突っ込むを入れなければ。

「相手の風貌に臆するその様が、
何よりの証だ。
それに、君の目・・・。」

思わず、息を飲み込む。
唾を飲み込むと同じ気がする。

「・・・・迷っているな。」

つっ、奥底に沈めた思いが出てくる。
自分にその勝ちがあるか、否か。
これから、誰かの命を踏み越えて生き残っていいのか？

「案山子以前の問題だ。
そのような状態で戦場に赴くとは・・・
不幸なことだ。」

言い残して、去る。
呆然と見送る。
・・・いや、ある。
答えを、答えを得るんだ。
この馬鹿アーチャーと一緒に。
だから、負けられない。

「はぁー。」

溜息が出る。
このお気楽なチャラけて、ハッチャけたアーチャーの存在に
助けられている。
そこが、複雑だ。
とっても。

「たしかにねー。

結構な御人と見た！！。
格が違うね！！。」

キャハ！
がよく似合う、アーチャー。
と言うか、勝手に出てくるな。

「睨まない、睨まない。
いい顔と溜息で勝手に出てきました！！。
一回戦とは格も器も違う相手だわ。」

からかう事も忘れないマメな奴だ。
大丈夫だと、言っている。
こうなればアレの時と同じように情報を集めよう。
せめて、それだけの差は埋めないと。
それでも、迷いを捨てられない。
それも、私というヒトだから。

夕方になる。
探索の時間だ。
屋上に行ってみよう。
きっと、綺麗な燈色に染まっているはずだから。
それでも、青色だけど。
気分だ、気分。
遠坂凛がいないといいな。

三階に行くと、男に声をかけられる。

「黒井も一回戦を突破したのか。
おめでとう、生き残ったわけだな。」

黒井。
自分の名だ。
記憶の無い、予選の時の友人だっただろうか？

「この聖杯戦争から帰るには、
優勝するか、敗北するかしかない。
生きて帰る日がくるといいな。」

どこか、鈍痛が走る。
意味が解らず、屋上に向かった。
変わらず、青色だ。
そして、居た。

「あなたの二回戦の相手、聞いたわ。」

なぜ、彼女から話しかけて来た。
私、なにかしました？
アーチャーに平手したければ、いつでも出しますよ。
と言うボケはよして、

よっぽどヤバイ相手らしい。
アジアチャンプよりも。

「もう現役じゃないけど、
ダン(彼)は名のある軍人よ。」

軍人？
イエッサー！
ビシ！！　敬礼！
ガチホモ。
あの、スパルタの戦士は下の仲だったとか？
・・・、嫌だ！！

「西欧財閥の一角を担う、
ある王国の狙撃主だった。」

狙撃主。
アーチャーが浮かぶ。
銃を使うんだ。
ライフルも、使えるかも。
あの最初の夢には、それらしい音を聞いた。

「匍匐前進で一キロ以上進んで、
敵の司令官を狙撃するとか日常茶飯事。
ま、並の精神力じゃないのは確かね。」

うわ、凄い。
唯それだけです。

「・・・分かる？。
一回戦と何もかも違う。」

頷く。
それは、理解している。

「見たところ記憶も戻ってなさそうだし・・・。
ホーントご愁傷さま。ただでさえ弱いのに、
そんなハンデまで持っちゃってねー。」

うう、解っていますよーーー！！
解っています！！
フルボッコにされている。

「根性論はあんまり口にしたくないけど、
勝利への執念は目的から生まれるもの。
記憶が戻らないのは祟るわよー。」

まさか、アーチャーの時の仕返しか。

まさかまさか。
心配からの言葉だと嬉しいなぁ～。
その他諸々、覚悟はしている。
この赤い痴女が教えてくれた事はありがたい。

「解っているし、理解もしているわ。
大体、聖杯戦争は、
サーヴァントとマスターの二人三脚でしょう？。」

記憶の事は、諦めている。
そのうちに思い出すだろうし。
以外に楽しいものだ。
夜の月も、この青空も、見るもの全てが心地いい。
諦めが悪い。
それも私なのだ。
学校敷地内というのが、悲しいけどね。

「それもそうだけど。
ホントに理解してるの、あなた？。」

言い返す言葉も無いらしい。
やった。
私は、やっと、言葉で人に勝った！

「それに、もういいわ。」

もういいって何がですかー？
楽しいね。
やっほ！

「例えあんたの宝具がどんなに強くても、
このままだとあっさりサー・ダンに
殺されるでしょうね。」

え？

「宝具ってアーチャーにもあるの？。」

・・・。

「はぁ！！。あんたって宝具も使わずに
エル・ドラゴを倒したの！？。」

驚かれる。
怒鳴られる。
アーチャー。
お前、なぜに黙っていたの。
あとで自室に呼び出しだな。

「宝具ってのは、
サーヴァントがサーヴァント足らしめる
絶対的な力よ。」

次第に落ち着く。
余計なことを言ったのね。
どうしよ。

「にしても、見直したわ。
あなたのサーヴァントの宝具が
桁違いに強いから、
エル・ドラゴを倒せたと思ったわ。」

とにかく凄いらしい。
自分の口の軽さは、凄いと言うのも解った。
気をつけよう。

「でも、ますます危なっかしいなぁ。」

なにがですか？
言葉の勝利が、消沈。
複雑な事になった、

「予選を突破したのに記憶を
取り戻していない事といい、
宝具を使用できない事といい、」

「あなたのパーソナルデータは、
問題抱えすぎるわ。」

理解しています。
問題過多なのね。
うん、理解した。

「予選を突破した時にバグが発生して、
パーソナルデータに傷を付けたか。」

・・・。
僅かに、心当たりがある。
私は崩れ落ちる間にモノクロの死体を見た。
だから、生きなくては、と思った。
その後にアーチャーを召喚？したわけで。
召喚前、確か自分は、あの人形に、
負けた。
え、なんで、思い出すの？

エーテルの欠片を、使って、死ぬ事も拒否して
自分は、自分は、

「どうかしたの？。
顔色が悪いわよ。」

あぁ、助かった。
背中に汗を感じる。
この調子なら予選を思い出せそうだ。

「とにかく、原因が分からない以上、
サーヴァントを使いこなして、
魂の改良を繰り返しなさい。」

うん、それはあれの時でも続けています。

「サーヴァントとあなたの繋がりを
強化すれば、もしかしたら宝具が使えるように
なるかもしれないわ。」

解決策は其処ですか。
ちょっと、泣きたいなぁ。

「セラフは基本的に、参加している
全てのマスターに対して平等の筈よ。」

確かに、それはそうだ。
でも故意的にアーチャーが
秘蔵している可能性もあるのですが・・・。
気にしすぎか？

「なんで、宝具を使えないマスターが居ると
分かれば、何らかの形で修正処置を施すでしょう。」

だといいな。
あとで、色々と問いただそう。
遠坂凛にお礼をいい、自室に走った。

7―1　喜んで、驚き（後書き）

やっとの、思い出し。
でも少しだけ。
この物語はｉｆで構成されている。
もしも、アーチャーが外道様だったら？
な成分です。
他にもありますけど。

7_2　縁には警戒を（前書き）

やはりで、このパタン。
寂しいとです。

7―2　緑には警戒を

一階に向かう。
目的はもちろん、ケーキではない！！
アリーナです。
なんで、ケーキが出るのですか・・・。
にしても、なんで、宝具のこと黙っていたの。

「ほぉー、気にしてるか！。」

「あ？、なんの事です？。」

いけないいけない。
握り拳を作ってしまった。
でもね、解く気は無い。
あれ、笑顔になってる気がするわ。

「えっと。」

消えるな！
逃亡するな！！
気がかりあるなら言えよ。
根掘り葉掘りしつこく聞こう。
それと訂正や謝罪の言葉を考えてよ。

聞くのは自室でじっくりと調理しましょう。
端末のあの音が響く。

‥‥第一暗証鍵を生成
　第一層にて取得されたし

変わらない文面です。
ハイ了解。
アリーナに行きましょう。
なるべく、エネミーも沢山倒そう。
トリガー捕獲失敗で敗退なんて、恥ずかしい。
アリーナの入り口にダン・ブラックモアが居る。
覗き見はせず、聞き耳を立てる。
いや、覗いてもいいかも。
沢山の素人、この場合は戦争の素人の意味合いです。
サーヴァントは、緑色だ。
緑。
身採り。
よくある戦隊ものの中の人達の中では
不吉とされている。
馬鹿っぽいと言うのには、其処が起因しているかも。
理由は上記に記載。

「二回戦の相手を確認した。
・・・まだ若く、未熟なマスターだが、
一回戦を勝ち残った相手だ。」

それは、この校舎に居る皆さんがそれだよ。
何を言っているのやら。
改めて不安になってきた。

「油断をするな。
　予断も独断も、感心はせんぞ。」

うん、かっこいい。
あれ？
この場合はどうだろう。
サーヴァントが若い。
マスターが老いている。
サーヴァントは若死にしたのだろうか？
それとも、
その容姿が一番力があったのだろうか？
もし前者なら、
アーチャーにも勝気はある、といいな。

「へいへい、分かってますって。
　どんな相手だろうと手加減なし、
　かつシンプルにぶっ殺しますよ。」

チャラい。
いいなぁ、
チャラいだけなら性格をチェンジさせたいです。

顔、どんなんだ。

「ま、ともあれ、
あっちも既に一人殺してるワケですし?。」

確かに、お互いに一人殺しています。

「一回戦で戦った連中より、
幾分マシなんじゃないすかね。
いや、精神的に。」

以外に一般的な感覚を持っているのか。
本当の戦いを知らない、私たちよりの。
殲滅戦よりか、個人戦よりか。
殺しを許さないか、残酷か。
解ればいいのになーーー。
私はのんきか。

「それが油断というのだがな。
・・・ともあれ、この戦いは連携が肝要だ。
私の指示に従え。」

ん、これは、不協和音がしてきたぞ。
マスターの指示に従ってない、と聞こえた。

「一回戦のような独断をするな。
この戦場は、
ただ勝つだけでは許されない戦いだ。」

やはりと言う感じだった。
独断。
それはどこで独断で動いたがか重要だ。
アリーナか、校舎か。
校舎での独断行動だとしたら、
非常に私にもダン・ブラックモアも困るはずだ。
私は校舎では警戒の文字が無い。
ダン・ブラックモアはペナルティーが存在する。
よっぽどの覚悟がないと校舎での不意打ちはない。
警戒のため、
今回はアーチャーには出っ放しで居て貰う。

「よいか。
あのような真似は二度とするな。」

「あー、はいはい、分かりましたよ。
ったく、口うるさい爺さんだぜ。」

うん、年上を敬え。
死んだ歳は不明だけど、

あの緑は見た目まんまの歳じゃないのか。

「あの緑がサーヴァントね。」

勝手に出てきて一言。
言っておこうか、早い内がいい。

「アーチャー、
この戦いではずっと姿を晒しといて。
絶対に傍から離れないでよ。」

はぁ？

呆れているのか？
今の声は。
肩は震えてない。
笑ってないようだ。

「了解。
警戒度Ｍａｘだね。
ああ言うのは油断無い方が良さそうだわ。」

理解はしてくれたらしい。
毎回こう言うのだと非常にありがたい。

「一回戦のエル・ドラゴはマスター運が悪かった。
あのマスターの実力はかなりだろうね。
どっちにしろ、強敵なのは変わりなし。」

最後に頑張れー。
と一言。
さらっと消え・・・なかった。

えへv

おい。

さて、行きますか。
それにしても、きちんと言うもんですね。
ダン・ブラックモアがアリーナに入っていく。

「気を張って行こう!!。」

そうですねー。
呆れながらも私達は、続いて入った。
アリーナに入ると、なにかを感じた。
危険だと、立ち止まるなと、自分達が思っている。
なに、これは。
危険危険進め進め、進まなければ、死ぬぞ。
体が思い通りに動かない。

ここに長くいれば、私達の命を削る。
・・・。
この場合は、マスターである私の魔力だろう。
急に頭が冷える。
私は進めと、誰かが怖いと、思っている。

「っ、毒かよ！
ゆら、しっかりしろ。
ぼーっとしてると、的だぜ、的！！。」

「解って、る。」

私は解っている。
頭の思考が一致する。

『進もう』

一体、私はどうなっているのか。
進もうか。
考えるのは後でもできる。
今は進まないと後なんて悠長な事、言えない。

「ならいいけどね。
さて、このアリーナ内に毒が発生。
しかもこの高濃度な毒、相手の宝具だわ。」

ふむーっと関心顔。
意外な顔だ。
真面目顔は数回しか見てない気がする。
不真面目だもんね。
仕方ない。

「相手は身を隠して、
自身の得意なフィールドで戦う。
いや、これはこれは合理的ですな。」

それはアーチャーにも言える事のようだ。
待ち伏せ、射殺。
うん、合理的。
あの夢の狙撃主がアーチャーのような気がする。

「何を考えるの?。
ちゃちゃっと、基点を潰しに行くぜ。」

そうですね。
行きますか。
エネミー、居るかな。
居るといいのにな・・・。
やっぱり居ないと嬉しいです。

7_2　縁には警戒を（後書き）

リアルの報告。
子猫を飼っています。
元気いい、♀です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5252t/

サーヴァントは愉快人！？

2011年12月26日23時47分発行